

50567

教科書文庫

5
810
45-1948
01304 498131

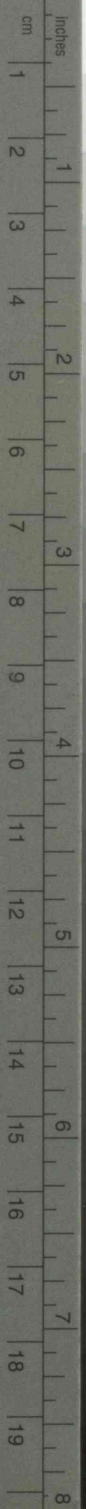
1948

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

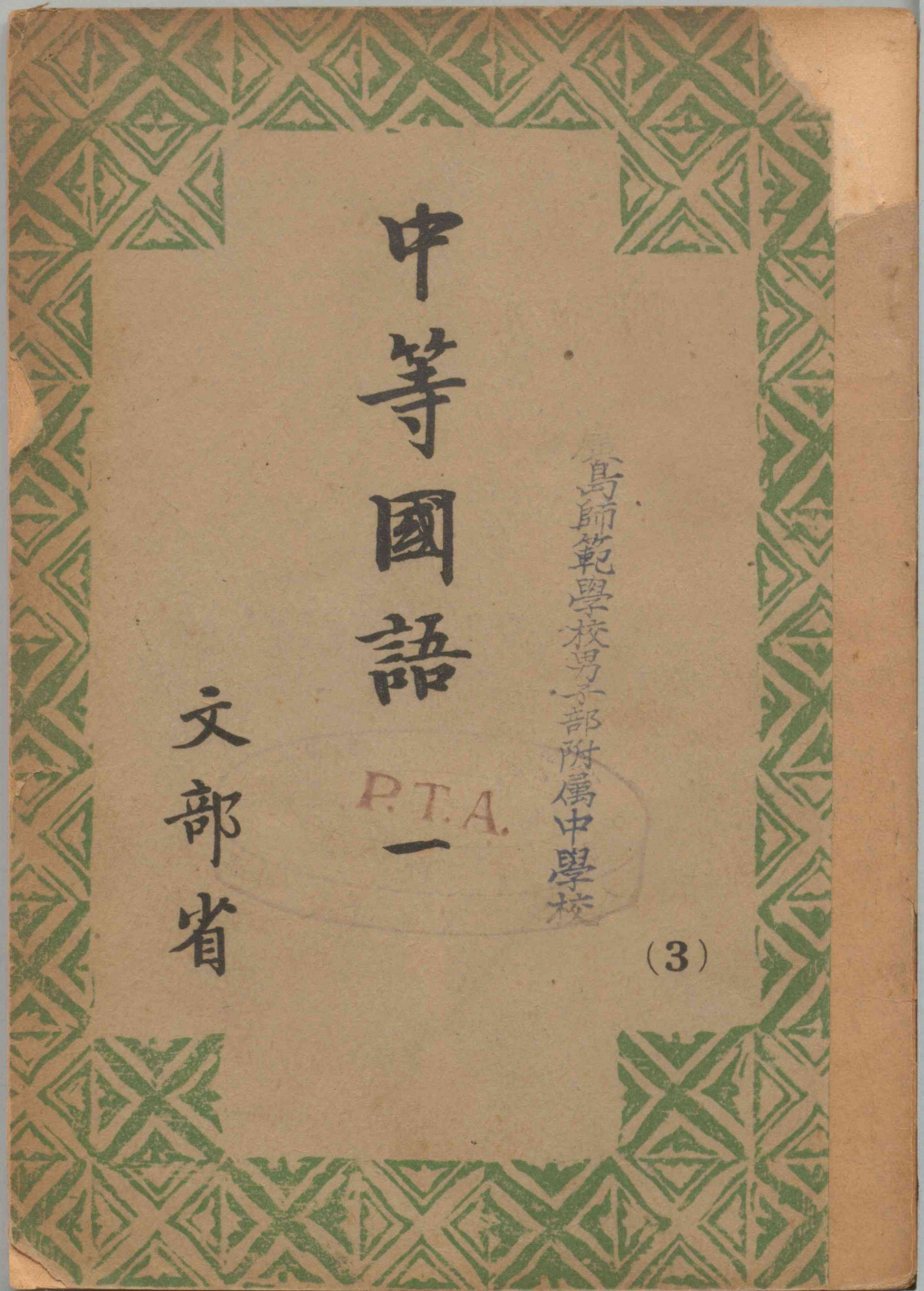
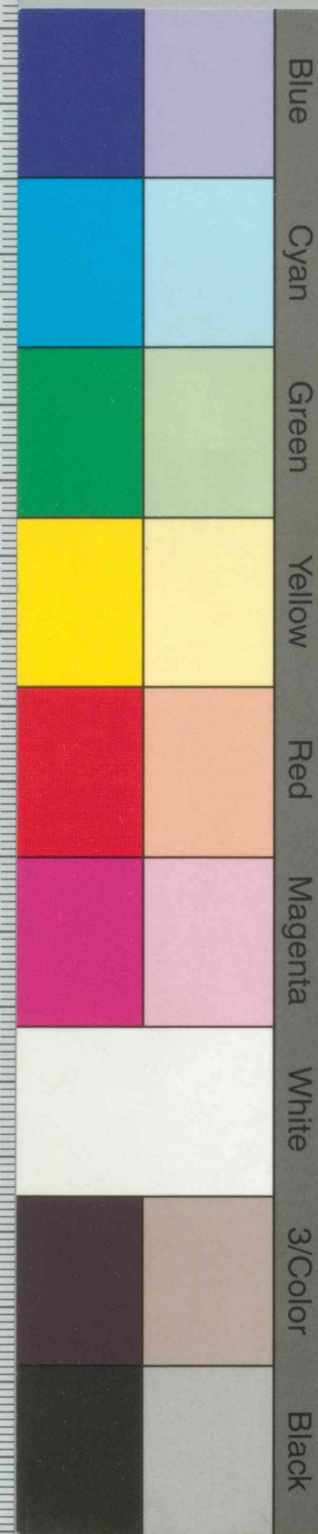


© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



# 中等國語

## 文部省

東京師範學校男子部附屬中學校

P.T.A. 一

(3)



中央図書館

中等國語

一

文部省



(3)

広島大学図書

0130449813



目 録

一 散文詩……………一

二 ふるさとの英世……………三

三 ラ・ジオ……………二十二

四 リヴィングストンとスタンリー……………二十九

五 春を呼ぶ……………五十七

附 録 國語學習の手引……………六十三

一 散 文 詩

この散文詩は、ロシアのイヴァン・セルゲイビッチ・ツルゲニエフという人の作である。かれは、富裕な地主の家に生まれたが、その理想主義とあい容れないために、生涯さびしい孤独な生活を続けた。そのために、もの見方が暗くなったが、また深く鋭くなり、すぐれた多くの作品を残している。繊細な感覚を表現した文章の美しさも実にすばらしいものである。

「散文詩」には、晩年の生活中の種々な印象を書きとどめた小品が収められている。孤独のさびしさが全体ににじみ出ているが、同時に同胞に対する温かい愛情といたわりの心がしみんと読みとられるであろう。

私たちはいろいろな作品に接することから、その作者の人がらに触れることができ、いつの時代の人にも、いずれの國の人の心の中にも飛びこんで行けるのはうれしいことである。

一 すゝめ

私は狐から帰って、庭の並木道を歩いてきた。すると、私の前の方へ、いぬが駆けて行った。

ふと、いぬは刻み足になって、あたかも鳥をかぎつけたかのように忍び足をしはじめた。

私は並木道傳いに、すつと目を離って見た。そして、まだくちばしのあたりの黄色い、頭にふん毛の生えた一羽の子すゝめを見つけた。子すゝめは巢から落ちて、(風はひどく並木道のしらかばをゆすぶっていた。)やつと生え出したばかりの翼を、たよりなげに廣げたまゝ、じつとしていた。

いぬは静かに子すゝめに近づいて行った。急にかたわらの木から、すばやく胸の黒い親すゝめが、

つぶてのよういぬの鼻先へ飛びおりて来た。絶望のあまり、全身羽を逆立て、しどけなく、あわれげに鳴き叫びながら、いぬの、大きな歯をのぞかせて開いた口に、二度ほども飛びかゝった。親すゝめは、子すゝめを助けようと、身をもつてかばうのであった。けれど、小さな全身は恐怖にわななき、声は乱れ、しわがれて、とう／＼氣絶してしまつた。かれは身をいけにえにしたのである。かれの目には、いぬがどんなにか大きな怪物に見えたに違いない。しかもなお、かれは安らかな枝の上にとまっていることができなかったのである……。意志よりも強い愛の方が、かれを枝から飛びおりさせたのであつた。

私のトレゾル(いぬの名)は、じつと立ちどまつて、あとすさりした。……いぬもまたこの力を認めたいものとみえる。

私は急いで、うろたえていたいぬを呼びもどし、敬虔けんけんの念にうたれながら立ち去つた。そうだ、笑つてはいけない。私はあの小さな悲壯な小鳥に對して、小鳥の愛の衝動に對して、尊敬の念をいだいたのである。

私は考へた。愛は死よりも、死の恐怖よりも強いと。それによつてのみ、愛によつてのみ、生活は保たれ、押し進められ、行くものであると。

二 こじき

私はまちを通つていた……。老いぼれたこじきが私を引きとめた。血走つて、涙ぐんだ目、あおざめたくちびる、ひどいぼろ、きたならしい傷……。あゝ、この不幸な人間を、貧窮がかくもみにくく食いまくつたのだ。

かれは、あかい、むくんだ、きたない手を私にさし伸べた。

かれは、うめくように、うなるように、助けてくれというのであつた。

私はかくしを残らず捜しはじめた……。財布もない、時計もない、ハンカチすらもない……。何一つ持ち合せてはいなかつたのだ。

けれど、こじきはまだ待つて……。さし伸べた手は弱々しげにふるえおのゝいていた。すつかり困つてしまつて、いら／＼した私は、このきたない、ふるえる手をしっかりと握つた。

「ねえ、きみ、勘忍しておくれ。ぼくはなんにも持ち合せていないんだよ。」

こじきは私に血走つた目を向け、あおいくちびるにえみを含んで、かれの方でもぎゅつと私の冷えていた指を握りしめた。

「まあ、そんなことを。」とかれはさゝやいた。「もつたいねえでさ。これもまた、おもらいでござえますよ。」

私もまたこの兄弟から施しを受けたことを知つたのである。

(ツルゲニエフ作、中山省三郎訳「全訳散文詩」による)

二 ふるさとの英世

第一幕

明治二十二年の冬。

二 ふるさとの英世

野口清作の家。

第二幕

明治二十五年の夏。

長照寺境内。

人物

野口清作(英世) 十四歳

父 佐代助 四十九歳

母 シカ 三十七歳

姉 イヌ 十六歳

代 吉 十五歳

(以上、第一幕の時〇年時)

小林先生 三十三歳

その他、長照寺の和尚、村人。

第一幕

会津翁島千代田村の農家、野口清作の家。

冬の夜。

いろいろのそばで、母親シカと姉イヌがなわをなっている。

少し離れたランプの火の所で、清作と代吉が勉強している。  
そのうしろのふとんに弟の清三が寝ている。

代吉 (英語の Reader を持して) This is a pencil. That is a book……清さん、またかい。

清作 うん、もうじきできそうだ。待っていてくれ。(紙の上で数学の問題を解いている。)

代吉 清さんは、ほんとうに、がんばりやだからなあ。

清作 え、と「甲は毎秒二メートル、乙は毎秒一・五メートルの速さで歩むとすると、乙が十秒前

に出発した後を甲が追いかけて行けば、甲は出発後何秒で乙に追いつくか。」というんだか

ら……甲の……。

代吉 さすが数学の大先生も降参するかな。

清作 なあに、まいるもんか。

代吉 算術で解けば、ぼくにだってできるんだけど……。

清作 そりゃ簡単にできるさ。つまり、甲の出発の時に乙は甲より十五メートル先を進んでいる。

とところで、一秒間に甲は乙より〇・五メートルずつ近づくから、十五メートルを〇・五メー

トルで割れば、甲が乙に追いつく時間、即ち三十秒が出て来る。……しかし、これを代数で考

えると……うん、わかった。わかった。

代吉 わかったかい。(乗り出す。)

清作 (夢中で) 方程式の應用問題を解くには、題意を十分に調べて、適当な未知数を選ぶことがか

んじんだと言われた、小林先生のおことばの意味がよくわかったよ。ね、いいかい代さん。今

代吉 この三十秒がわからないのだから、これを未知数と考えてエックスとするんだよ。するとね、このエックス秒の間に甲の歩む距離は二エックスメートルで、乙が歩む距離は一・五メートルにエックスと十の和をかけたものになる。だから、二エックスは一・五かつこたすエックスかつことなつて、これを解くとエックスが三十と出て来る。そうら、どうだい。

清作 やあれやれ、とう／＼できた。(鉛筆を投げて腰を伸ばすためにおお向けに寝る。両手をあげた時、左手の指がやけどのため木の切り節のようになっていたのが見える。)

代吉 実際ぼくの方も待ちくたびれたよ。(同じようにおお向けに寝て) 清さんの根氣のよさにはあきれるよ。うちのおかあさんも言つてたが、清さんが、数学や英語のような、めんどろな学問ができるのは、清さんが努力家だからだつてよ。清さんはぼくのうちのふるをたきつけに来る時でも、決してリーダーをはなさないんだからねえ。

イヌ (自在かきのお湯をついで) さあ代吉さん、勉強ができたからごほうびのお茶を。  
代吉 ありがとう。しかし勉強のできたのは清さんの方だよ。

イヌ あんまり清さんをほめないでね、ます／＼てんぐになるばかりだから。

代吉 ほめるのはぼくばかりじゃないよ。小林先生はもちろん、長照寺の和尚さんまで。清さんの英語はものになるつてさ。

清作 よせよ代吉さん。それより、ひとつ腕すもうでもしようよ。

代吉 うん、やるかな。これまでの戦績は六十八対三十一だつたね。……よろしい。では、いよいよ

よ第百回めの腕すもう戦、果たしてどうらに軍配があがるか。清作三十七点の勝ち越しに対し、豪勇代吉の肉迫いかななるや。いよくお待ちかねの第百回戦の火ぶたは切られる。……さあこい。

清作 よしきた。(腕すもうが始まる。)

イヌ 代吉さん、しつかり。

代吉 (うなりながら) 今度こそは……。 (あっさり負けてしまう。) 百回めもついにだめか……。

イヌ、いろいろの所へ笑いながらもどる。

シカ ほんとに代吉さんはおもしろい人ね。

イヌ おかあさんも、一休みして、お茶にしたら。

シカ あたしはいいよ。もう少ししあげとかないとね、あすの朝までに十足届けられないからね。(と言いながら、雪ぐつのなわをなっている。)……清三は寒くないかしら。

イヌ (ふとんをなおして) ふとんがかつているからだいじょうぶ。……それにしても、おとうさん、遅いわね。(立ったまゝ、よろい戸をのぞく。)

シカ 雪は。

イヌ まだやまない。……おとうさん、酒屋へまわつたのかしら。

シカ 雪おろして疲れたのでしょ。

イヌ 多分、久しぶりでお金はいったから飲んでいるのよ。でも、せつかくの村長さんの御厚意も、おとうさんにはわからないのね。

シカ

そんなふうにするものはありません。

イヌ

だつて、清さんがあんなにはしがっているナショナルリーダーのお金、おとうさん、自分の飲みしろに使つてしまつたもの。

シカ

(だまつて仕事を続ける。それでイヌも大きくため息をつき、また仕事を手傳う。)

代吉

(起きあがって眞顔になり)ところで清さん、ぼくね、あした小林先生のところへ呼ばれているんだよ。西川義次君、八子彌壽平君もいっしょさ。先生は、なんでも、清さんのことでもなどと相談したいとおっしゃるんだ。

清作

(ちよつとびっくりして)ぼくのことです。

代吉

うん。

清作

一体なんのことだろ。

代吉

別に心配することはないさ。ほら、月曜日に読んだきみの作文のことでさ。あの時は実際はくも声を出して泣いたよ。小林先生も読みおわたあと、たまりかねてハンカチを出して、しばらく目を押さえておられた。あんなに清さんの氣持が包み隠さず書かれているんだものね。(じつと自分の左手を見つめ)てんぼう、てんぼう、(だん／＼あさけるように)このてんぼうのために、どんなに苦しんで来たか……。この左手のかたわりのために、どんなに悲しんで来たか……。いや／＼そんなことはどうでもいい。どうせぼくはてんぼうでかたわなんだから。

代吉

だけどね、清さん、ぼくたちちきものうも話し合つたけど、清さんのその手は、手術すればなおると思うんだよ。よい医者にかゝつて入院すれば、きつとまたもと通りになると思うんだよ。

清作

指に突き立てようとする。(神経質に)きみはこの手がなおると思う。……ぼくのこんな手が。ぼくはね、時々このくつついてる指を、一つ／＼小刀で引き裂いてしまいたくなるんだ。(と、いきなり小刀を手にして、指に突き立てようとする。)

代吉

(びっくりして)清さん。(と、清作の右手を押さえる。)

佐代助

その時である。どさり／＼と戸のあく音がして、雪とともに父の佐代助が、ころげこむようにはいつて来る。酔っている。

シカ

いやあ、どうも遅くなつてすまん、すまん。(みのだとか雪かきとかわからぐつをあちこちに脱ぎ捨てて戸の前にすわりこむ。)ほんとに家の中はあつたかいのう。(手を温める。)

佐代助

御飯は。(立ちあがって、戸をなからどんぶりを出そうとする。)

シカ

いや、いらん、いらん。きょうは久しぶりでみっちり飲んだからなんにも食いたかない。(代吉に氣づき)……。お、そこにいらつしやるは、松島屋の若だんな様じゃねえか。はっはっはっはっ。(意味もなく笑う。)

清作

(はつがわるいので立ちあがり)清さん、帰るよ。代数の問題ありがとう。

代吉

うん。

シカ

代吉さん、もつとゆつくりなさいよ。

代吉

もう勉強がすんだから、またあした来ます。

シカ

そうですか。遠慮しないでゆつくりして行けばいいのにねえ。

佐代助

そうだ、そうだ。酔っぱらいが帰つて来たからつて、そう急いで逃げて帰らずともいいじゃ

ねえか。

清作 (たしなめて) おとうさん。

イヌ (代吉を送り) 氣をつけてね。……あら、まだひどい雪ね。今夜はふとくかもしれないわ。  
雪が降るのに風が加わる。

佐代助 (炬に寝そべりながら) 村長の二瓶さんがな、雪おろしのお礼だというてな、五十銭くれたよ。五十銭銀貨をよ。

シカ それはようございましたね。

佐代助 うん、全くありがてえこった。

イヌ おとうさん、そのお金は清さんの本を買うために、村長さんが特別に計らってくださいましたお金じゃないの。

佐代助 ば、ば、ばかなこと言うない。

イヌ それとも、お酒を飲むようになって、よこしたもののな。

佐代助 そりゃあたりまえさ。あたりまえだよ。おれの働くものを、お、お、おれが使つてなせいでねえんだ。

イヌ おとうさん、少しはうちのことや清さんのことも考えるといいわ。

佐代助 よけいなこと言うない。

シカ (イヌに) もうおよし。せっかくおとうさん、いいごきげんになっているものを。

佐代助 そうだ、そうだ。せっかくの酔いがさめてしまいわ。ふん、おもしろくもない。……(歌う。)

石井茂、合津氏、和井内大野

……朝寝、朝酒、朝湯が大好きで、それで……。 (ふら／＼歩いて、清三のふとんの中にもぐりこんでしまう。)

清作 (父がふとんにもぐりこんだのを見てランプを消し、炬の所に行き) おかあさん、手傳いましょう。

シカ いいよ、おまえは。

清作 ぼく、働きたいんです。

シカ おまえは勉強さえすればいいんだよ。小林先生もあんなに力を入れて、おまえが將來、学問の道に進むことを保証して下さってるではありませんか。

清作 ぼくなんかだめです。先生や友だちにそんなにかわいがられる理由がわかりません。それにうちがこんなに貧乏なのに、長男のぼくひとり働かずに自分勝手なことをしてるのは、ぼく、たまりません。

イヌ 清さん、働くのは、あたしとおかあさんでたくさんなのよ。

シカ たくさんだとも、おかあさんひとりだけでも。そうそ、リーダーとかいう本も、あしたわらぐつをこしらえて持って行けば買ってあげられるし……。

清作 そのわらぐつのお金は、ランプの油や、清三のお正月のたびを買うのに使うことになっていたりありませんか。……おかあさんやねえさんは、なぜぼくが働くのをとめるんです。……ぼくがてんぼうのかたわ者だからですか。

イヌ (清作の声があまり大きいので、びっくりして) 清さん。

清作 (ひねくれて) きつとそうなんだ。ぼくがてんぼうで働けないから、ぼくに学問させるよりは



か道がないと思ってるんだ。

イヌ 清さん。まあ、そんなことを。

清作 (興奮して) ぼくだって働きますよ。力も代さんより強い。わらを打つことも、車を引くことも、ぼくにはできるんです。

イヌ 清さんには、おかあさんの氣持がわからないのよ。

清作 (あらたまって語氣を強め) おまえのその手をおかあさんにお見せ。(清作、泣きながら左手を出す。シカはその手をやさしく取り、思い出すように口を開く。) そう。ちょうど三つの年の夏のことだったねえ。……あの時は農家のいそがしい時でした。おかあさんは、この畑の自在かぎに、

しるのなべをかけて、おつゆの実をとり、裏へ出た、それはほんのちよつとの間だったのです。おまえはひとりはい出してなべに手をかけ、熱いしるを浴びてしまったのです。その上燃えるまきにこの柔らかい手を入れてしまった。(清作の手を強く握り) 引きつるようなおまえの泣き声……その声を聞いた時、おかあさんはどんなに申しわけなく思ったかしれません。おかあさんと命を取り換えられるものならと一心に手あてはしたものの、あとはやはりこの通りのかたわ……。それからというもの、なんとかして名医にかけても、おまえの悲しみを取り去ってあげたいと心にかけてはなかつたのです。でも、あれから十年たつてもこの通りの貧乏暮らし、おまえのために十分な治療を施すことができずに過ごして来ました。……

清作、おかあさんは、おまえが人のいうてんぼうだから働かずに勉強を勧めているのでは  
ありません。おまえのてんぼうはおかあさんのあやまちです。だから、きつとおかあさんが  
なおしてみせます。たゞ、おかあさんは、おまえが、おかあさんの不注意をせめすうらま  
す、また、人のあざけりにもひねくれず、りっぱに小学校を優等で卒業し、今はまた猪苗代高等  
小学校にはいつて、小林先生に見こまれるほどりっぱな成績をおさめているのを、どんなに  
喜びにもし、頼みにもしているかわかりません。……清作、どうかお願いだから、自分を苦  
しめず、またおかあさんのことも氣にかけて、しっかり勉強しておくれ。そして、それこそ  
りっぱなおとなになつて、この倒れかゝつた野口家を興しておくれ。おかあさんの生きる望  
みは、たゞ／＼おまえにかけているのだからね。

清作 (涙をふきながら話を聞いていたが) おかあさん、すみません。(頭をさげる。)

シカ おかあさんにあやまることなんかありやしないよ、清作。

この時、村人の戸をたたく音。そして声が聞える。

村人 おシカさん、おシカさん。(戸をたたく音) 来ておくれ、早く／＼。吉田のお梅さんがお産で  
すよ。(戸をたたく音。)

イヌ はい、はい。(と、返事をして) おかあさん、お梅さんがお産ですつて。

シカ (す早く産婆の道具を包みながら) それ／＼、今度はお産婆さんの御用だよ。

イヌ (母にみのかさをかぶせながら) 氣をつけてね、おかあさん。

シカ だいじょうぶだよ。(戸をあけて) はい、お待ちとおささ。

村人 (ちようちんの明かりだけ見せて) どうも夜分遅く御苦労さまです。

シカ いっえ、なんのこんなこと……。 (戸を締めて出て行く。)

清作 (もどって来たイヌに) わらぐつ、あと何足作ればいいの。

イヌ 四足と半分。

清作 ぼくはきょうの勉強もう終ってるんだ。ねえさん、お手傳いするよ。(と、わらを自分のそばに引き寄せ、不自由な手でなわをなはいはじめる。) おかあさんもたいへんだねえ。

イヌ (仕事をしながら) 一生けんめいよ、清さん。

—幕—

第二幕

磐梯山の見える霧島長照寺の境内。

せみの鳴き声の聞える夏の午後。

寺の裏から和尚と清作と母親シカが出て来る。清作は左手にぼうたいをして、首からつっている。

和尚 清さん、うれしいかね。

清作 はい。(顔色が白くなって、せいも伸び、前幕よりだいぶおとなっぽくなっている。)

和尚 おシカさんもううれしいだろうね。

シカ 清作の手術が無事にすんだのも、ほんとにみなさんのおかげです。

和尚 いや、何よりもおシカさん、あなたの心がけがよかったから成功したんじや。清作さん

も、いいおかあさんを持ってしあわせじやのう。

の清作  
和尚  
シカ  
イヌ

偉大なる西醫士若野の英世。彼の英世はもう一人、入る。 (きこえ) 同時に私達と一くは、少年野口英世からも、彼のちいさな夏に、(いつ世も) 手もめかめる。

清作 はい。

和尚 You are very happy. ちいさな清さん。

清作 Thank you, I am happy.

和尚 ほ、う、清作め、一月入院しても英語だけは忘れないとみえる。

清作 和尚さん、また代吉さんといっしょに英語を教わりに伺いますよ。ぼく、それを楽しみに帰って来たのです。

和尚 いいとも。わしもおまえたちに授業していると励みになる。いつから来るね。

清作 あしたから。

和尚 おや、退院早々の勉強始めかね。あい変わらずのがんばりやだな。

シカ それでは和尚さん、うちで、みんながこれの帰りを待ちわびておりますから、ここでごめんこうむります。

和尚 それはわざ、お立ち寄りくださってありがとうございます。清作君、お大事にな。(ていねいに礼をして去る。)

清作 シカも去ろうとすると、向こうから小林先生がやって来る。

清作 あつ、小林先生が……。

小林 (駆け出して来て) お、野口君。よかった、よかった。

清作 先生。(ぼろ／＼涙を流す。)

シカ 先生、おかげさまで無事に退院することができました……。

小林 おめでとうございます。清作君、おめでとう。

シカ ありがとうございます。清作君、おめでとう。たもとで涙をふく。

小林 きょう、退院の日というので、けさからお宅にお伺いして待つておりましたが、なか／＼帰つて来ない。それでいたゞまれす若松の渡辺病院まで迎えに行こうと出て来たところでした。  
(清作の方を向いて)野口君、学校の先生がたもきみの親友たちも、みんなきょうの日を楽しみに待つていたよ。

清作 ありがとうございます。先生、手術した手をお見せしましょうか。(首のほうたいをはずしかける。) いや／＼、あとでゆつくりと、みんなといっしょに見せてもらうことにしよう。その方が楽しみだからね。

小林 先生、それではまたうちへ寄つてくださいますか。

シカ もちろんお伺いいたします。

小林 きょうは清作のお祝いの日ですから、先生においでいたゞかないと……。  
シカ そうです。お祝いの日です。そしてまた、新しい人生への出発の日です。

清作 (母に)おかあさん、ぼくこゝで、もう少し先生とお話ししたいと思つていますが……。  
シカ いいとも。ゆつくりと先生にお礼を申しあげなさい。おかあさんはしたくのことで一足先に帰らせていたゞきますから。でも必ず先生を御案内するんですよ。……先生、お待ちいたしてありますから。お先に。(あやうやくと立ち去る。)  
小林 どうぞ。(見送つて)きょうの母ごのうれしそうなこと。(すぎの木立の所まで歩き)野口君、磐

梯山があんなに美しいぞ。見たまえ。

清作 先生。

小林 うん。

清作 ぼくはもうてんぼうじゃありません。

小林 うん、そうだ。何一つ不足はなくなつたのだ。

清作 はい。(歩み寄る。)ぼくが入院できたのも、こうして手術して手をなおしていただけたのも、みんな先生のおかげなのです。

小林 先生ばかりじゃないさ。代吉君はじめ、西川君、八子君それから組の人たち、それに猪苗代校の教員一同が、きみのためにお金を出し合つたのだ。

清作 先生、この御恩は決して忘れません。

小林 ありがとうございます、野口君。しかしみんなは、きみに恩をかけようと思つてあまのり金出したのではないんだぞ。きみのおかあさんと同様、それが母親や友だちや先生の当然の義務と信じていたからこそ、盡くしたまでのことだ。

清作 先生、すみません。ぼくの言い方が悪かつたのです。

小林 なあに、すむもすまないもありやしない。(切り株に腰をおろしながら)ところで、手術のあとは痛むかね。

清作 少しも痛みません。

小林 ちよつと見せてくれないかね。

清作 だって先生は、あとでゆつくりごらんになるとおっしゃったではありませんか。  
小林 うん。そりゃ、ゆつくりとながめるのは、あとも結構なんだが、今は、ちよつとのぞかせ  
てほしいんだ。

清作 (笑いながら) 先生、するいですよ。

小林 きみこそもつたいぶって。(笑う。)

清作 (ほろたいを解きながら) 先生、笑わないでくださいね。

小林 なあに笑うもんか。(指を見て) よし、なおっている、確かに。

清作 親指も動くんですよ。ほれ、中指も、小指も。

小林 (命令するように) しまつときなさい、大事に。

清作 (再びほろたいをかけながら) 先生。医術って、全く、奇跡のようなものですねえ。

小林 奇跡ではない。科学さ。……この科学が人類の進歩に大きな影響を及ぼすのさ。

清作 ぼくの幸福も科学によってつくられたのですね。

小林 そういふわけだ。しかし、若松の渡辺ドクトルの技術もすばらしいものだなあ。

清作 え、もう二度となくなるまいと思ひこんでいたこの手が、すっかりなおってしまったのです。  
くっついていた指の一本一本が、離れ々に自由に動くようになったのですから……。

小林 すぐれた技術者だ。ドクトルはアメリカの大学で勉強して来られたと聞いていたが……。

清作 そうです。書齋には英語やドイツ語の本が山と積んでありました。

小林 あの人の専門は外科だが、内科にかけても、東北で指折りの人らしい。やはりほんとうに勉

清作 強するには、外國へでも出かけて行って、よい研究所で勉強する覚悟でなきやいかんなあ。  
病院も全部西洋造りでした。ドクトル先生はいつも洋服を着ていました。からだの大きな、  
それはそれはおもしろいかたでした。

小林 うん、うん。

清作 ドクトル先生は、ぼくの入院中、いろ／＼医学の話聞かせてくださいました。熱して来る

と演説まで始めました。それから、先生、ぼくは、顕微鏡までのぞかせていたといたのです。

小林 顕微鏡までね。ふん。

清作 え、ぼくはあの顕微鏡のレンズを通して、たくさん細菌のいる果実を見ました。そうそ

う、先生、一滴の水の中にも無数のばい菌がすんでいるものなのですなえ。(清作の目が輝い

て来る。) 先生。

小林 なんだね。そんなにあらたまつて。

清作 先生、ぼくはこれまで医術をけいべつしていました。

小林 どうしてね。

清作 だって、お医者様の力でぼくの手がなおるとは、どうしても思えなかつたからです。

小林 うん。

清作 先生、ぼくは医者になろうと決心しています。

小林 うん。

清作 先生の御意見はいかゞですか。

小林 (しばらく考えて) よかろう。先生も大賛成だ。

清作 賛成してくださいませうか。

小林 賛成どころか、これからきみがその道に進むために、できるだけの應援もしよう。

清作 (うれしそうに) 先生。

小林 野口君。きみのきよの喜び、きみのきよの感激、そしてきよの決心が、きみをりっぱな医者にしあげてくれることを、先生は祈る。きみは熱心だ。その上、がんばりやだ……。それこそ何事もやりとげずにはおかない、何事も見きわめずにはおられない科学精神を体得している。それらは、きみを將來、日本の偉大なる医学者として世界の舞台に立たせる絶対の素地となるものなのだ。(興奮して来る。) 先生はそのことを信じている。先生はきみがその道を通すことを固く信じている。

清作 ぼく、きつとやってみせます。やってみせませうとも。

小林 やりとげてみせなさい、野口君。(清作の手を握る。)

清作 先生。(感激の涙にくれる。)

この時、清作の姉のイヌがふたりを迎えにやって来る。

イヌ 小林先生、お待ちしております。

小林 (気がついて) あ、これはどうもわざわざ。

イヌ 清さん、どうしてこんな所でゆっくりしていたの。

清作 うん。

小林 わたしたちは語に夢中になっていて、すっかりうちへ帰るのを忘れていた。

イヌ どうぞおいでください。お待ちしておりますから。

小林 行こうかね、野口君。そう待たせても悪いから。

イヌ (清作のそばに行き) 清さん、(にこ／＼しながら自分の手を清作と同じようなかっこうにして) なおってねえ。

清作 え、すっかり。……見せてあげようか、ねえさん。

イヌ いいわよ、こんな所で。あたし、うちに帰ってから、ゆっくりと見せてもらうわ。

清作 おや、ねえさんも小林先生と同じようなことを言うなあ。(笑う。)

小林 (明かるく笑いながら) 清作君はね、手をなおしてもらったので、そのお礼に、これからすばらしい医者になるって、はりきっていたのです。

清作 そうじゃありませんよ、先生。医学のおもしろさを知ったのですよ。

小林 ばい菌なんかのね。

イヌ まあ、いやだ、ばい菌のおもしろさだなんて。

清作 先生は、すぐばくの言うことをしようだんにしてしまうんだもの。

村人の歌が聞える。

いやあ、会津磐梯山は宝の山よ。

さ／＼にこがねが、え／＼またなりさがる。

小林 磐梯山か。(振り返って心もち山の方へ歩き) 磐梯山は全くゆつたりとした、いい山だ。(清作もイヌ

もそれにさそわれて歩く。わたししたらは、あの山のような心を持って、あの山のような姿で、生きぬいて行きたいものだ。ねえ、清作君。

清作 はい。そう思います。

村人の歌はなほも続いている。

幕

(脚本シリーズ「第三 宮津博の作による」)

## 三 ラジ オ

① 澄みきつた青空に高くそびえ立つラジオ塔の、縦横に交錯するアンテナ線をじつと仰ぎ見ると、私はいつも、自分が一瞬のうちに世界じゅうを飛びまわることのできる飛鳥になったり、いながらにしてあらゆる出来事を知っている魔法の貝がらになって行くような、不思議な想像の中に包まれて行くのです。

もしもみなさんが、放送所のアンテナから放射される電波が、一分間に数十万回というものすごい回数で振動しながら、四方に広がって行くことや、その速さが、一秒間に地球を七まわり半することなどを、少しでも御存じでしたら、私のこの想像も單なる愚か者の白晝夢でないことがわかってくださると思います。

ラジオが発明されて以来、人間は音の世界の主人公となって、この世界の廣がっている限り、人間は宇宙をも支配しつゝあるのであります。ラジオがある限り、もはや人々は、人跡まれなどんな山奥

にいても、大洋のまつたゞ中に取り残された寄るべない孤島にいても、ひとりぼっちということはありません。雪と氷にとざされた極北地方では、文明の利器たる電信・電話すらその用をなしません。こういう場所への唯一の連絡にもラジオが用いられています。したがってラジオの受信装置が、人間の生死の問題を解決して行くことも決してありません。航空機の進路を正しく導いて行くことはもちろん、現在では、宇宙に散在する無数の恆星と地球との距離を正しく測ったり、月の世界と通信を試みたりさえしているのであります。

② こんなに雄大な廣範な機能を持つラジオが、一面、人々の個々の生活にしっかりとつながって、ひとりひとりの人に向かつて、常に親しく、常に平等に、その大きな役割を果たしているということも、他にあまり例を見ないおもしろいことであります。ラジオはあらゆる人々に、個人的に話しかけ、親しく接しています。それが一國の首相であろうと、無名の勤労者であろうと、ラジオの音や声は決して変わることはありません。だれにでもわけへだてなく、十年の知己のごとく話しかけるのです。しかも、こゝで話されることばというものは、書かれたものよりも、はるかに生きた感覚と氣魄に満ちていて、人に與える感銘もその効果も、深く高いものであります。それは、より直接的であるとともに、人を感動させ、人の心を捕らえる力もはるかに強く大きなものであります。ラジオを通じて傳えらるるひとりの叫びが、國內のみならず、全世界を感動のるつばの中に投じた例は、これまでも決して少なくないのであります。ですから、ラジオによって人間は、自分の活動する領域を、これまでよりも数倍、いゝえ、数十倍、数百倍にも廣げることができるようになったといえるのであります。

③ その上、私たち個人に與えられている時間量にはおのずから制限がありますが、ラジオはこの制限

を破りました。人生五十年、昔の人々はそのあまりにも短いことを、幾たびかこち嘆いたことでしよう。しかるに今日では、わずか五十年の間にはとうてい知り盡くすことのできない、味わい盡くすことのできない事がらを、教え、樂しませ、體驗させてくれるばかりか、世界じゅうのいろいろな文化財を、いながらにして受け入れることができるようになったのであります。一秒間に地球を七まわり半するという放送電波の速さが、人間に與えられている時間的拘束を破つたのであります。みなさんはおうちの受信機に、ちよつとスイッチを入れ、ダイヤルをまわしただけで、樂しい音楽や、珍しい演藝や、政治・經濟・宗教・文化・社會など各部門にわたる講演・講座や、有名な人々の声や、世界のあらゆるじよめきを、手に取るように聞くことができるのであります。もしもみなさんが世界じゅうをまわつて、各國の風物に接し、各大学に学び、各地の劇場や音楽会をのぞき歩くとしたら、それだけでも幾十年を要することでしょう。私たちはこれを單に書物や新聞や雜誌の上で間接的に知つたり、あとで報告されたりするのではなく、國內の、そればかりでなく世界じゅうの、どこでいつどういふ事件が生じて、ラジオの現地からの中継放送によつて、時を同じうして、じかに知ることができるのであります。しかも私たちの生命が數倍、數百倍も延長されたということができるのであります。

このように空間を超越して廣がつて行くラジオの世界では、人と人との間にけがねを作つたり、國と國との間に境を作つたりしません。ラジオは聞く相手は個人であると團體であるとを問はず、いっさいのものに話しかけ、いっさいのものを包括してしまひます。したがつてラジオは、私たちひとりひとりの持つ氣持や感情や考え方を、一つ一つ結び合わせて、一つの團體の氣持や感情や考え方へ、次第に高めて行く道具になります。こうした一つ一つの團體、例えば村や町や市や縣の各團體が持つ氣持や感情や考え方を、また一つ一つ結び合わせて、一つの國家、一つの民族、一つの世界の氣持や感情や考え方に、次第にまとめて行く役割を果たします。例えば、新憲法の精神に基づいた画期的な總選挙が行われた時、ラジオが全面的にこれに協力して、その力を發揮したのも、こういう使命を果たすためであつて、ラジオのこうした機能を十分によく生かしていることこそ、放送事業の形成と發展の上に最も重要なことであります。このように、ラジオは國民ひとりひとりと國家との間に精密にして巨大な橋をかけていますが、それはまた、ある國家と他の諸國家との間にも雄大な橋をかけているのであります。ラジオが各國に送るもの、この國民の声こそは、國境を越えてあらゆる他の國民の耳を打ち、その心の奥深く響いて行きます。したがつてラジオは、最も國民的なものであるとともに、人間が考えうる最も國際的なものであるともいえるのであります。耳を持つているものならば、だれでも自由に、平等に、(天來の交響樂に耳を傾け、各國民の声を聞くことができるのであります。)

以上でラジオの持つおもなる特性について、ほゞおわかりになつたことと思ひますが、では、日本の現在のラジオが、日々どのようにしてみなさんのもとに送られて行くかという事について、次に少し述べてみましょう。

新橋駅から虎の門の方へ一町ばかり、芝田村町の交叉点を右にまわるとすぐ、放送會館の巨大な建物がおびえ立っています。外見はなんとなく寄りつきにくい建物ですが、一步、中へはいつてみますと、多くの訪問客にまじつて、みなさんが劇場や映画館ですでおなじみの俳優や音楽家たちが、日々の新聞や雜誌でよく見かける知名の人々が、エレベーターの前にたゝすんだり、らせん形の白い階段を

おりて来たりしています。また、いそがしそうな職員が、人々の間を縫って、行き来しています。みなさんはこの放送局の活動振りをのぞいてみたことがありますか。人とマイクロフォンと機械と、机の上には山積する書類と電話と、その他いっさいのものが、手もつけられないような混乱の中に、不思議な諧調を作って整然と動いている美しさを、一度でもながめてみたことがありますか。

もしもみなさんが、いろいろの放送番組が企画され、整理され、演出されて、御家庭まで送り届けられる系統図を、頭の中で描くことができましたら、この会館内の何もかもが、決して乱雑に行われていたのではなく、十分考慮されたプランによって行われていることをすぐおさとりになることと思えます。この放送本部は、編成局・技術局・事務局・経理部・庶務部等に分かれていますが、そのうち編成局は番組の企画から演出までの仕事を受け持ち、技術局はスタジオから放送所までのすべての技術的活動を統括しています。

④ ます編成局には、企画部・演出部・報道部等の各部門がありますが、企画部は文字通りあらゆる番組の企画をするところで、編成課・社会課・音楽演藝課・教養課・地方課の五課に分かれています。ラジオはみなさんのものであります。ですから、まず何よりもみなさんの生活の中にしつかりと根をおろさねばなりません。そのためには、どうしても、みなさんの考え方・感じ方・動き方の中に、深く、正しく、廣く滲透して、そこに作りあげられるおの／＼の番組が、個々の人々の意思と動向にできるだけびったり合って行くようにくふうをこらさねばなりません。そこで編成課では、放送文化研究所があらたに行った科学的な世論調査などに基づいて、地域別・職業別・年齢別・男女別等によって、国民全体の個々の生活のしかたや、一日のうちで放送などの聞ける時間や、その好みなどを十分

に調査し、それによって早朝五時から夜十一時にいたる通計一日十八時間にわたる放送時間を、農山漁村と都市などの地域別と、学校・婦人・青少年・勤労者などの対象別と、落語・漫才・音楽・演劇・講演・スポーツなどの内容別との三種類に大別し、それらを一日の放送時刻のうちで最も適当な時刻にあてはまるようによくあばいして、放送時刻別と内容別による番組全体のわくを一箇月分ずつ作りあげて行きます。

社会課と教養課と音楽演藝課は、このわくに應じて、わく内の個々の番組を企画するところで、例えば社会課では、政治・経済・科学・藝術・文化等にわたる各種の問題や、農地改革・公衆衛生・食糧供出・住宅復興などの社会全般の問題や政策を取りあげて、これをどういうふうな番組面に現わして行くかをくふういたします。放送討論会とか街頭録音などもすべてこの課で行うのであります。教養課は、学校放送とか、婦人の時間とか、語学講座・宗教放送などを取り扱い、音楽演藝課は、いうまでもなく古今東西にわたる娯樂演藝・純粋音楽・演劇藝術などの取捨選択を行い、あわせて、藝術祭の中継放送を決定したり、新作物語の内容を考えたり、連続放送劇の主題を選んだりいたします。このように、以上の三課で各番組の提案が出来るうと、これを一まとめにして編成課に提出いたします。一方、地方課でも、全国四十四局の各放送局とよく連絡して、各局からの提案を寄せ集め、それを整理して、同じく編成課に提出いたします。

この番組の原案は、対象別(例えば婦人の時間など)、種目内容別(例えば演劇とか邦楽とか歌謡曲など)の各製作班の、企画する者、これを整備する者、演出する者などが一つに集まって考えたもので、單に企画者だけのひとりよがりな思いつきや、演出者だけの勝手な好みだけで作りあげられたもの



のではありません。編成課では、この案知を察めて作りあげた提案を一旦とめにして、一箇月先の一箇月分の番組を作りあげ、これを番組を審議する最高機関ともいふべき編成会議にかけます。この協議員は、本部の全部課長と全国各中央放送局の放送部長とで構成されていて、こゝで厳正な批判が行われ、番組全体にわたる最後の採否が決められるのであります。

さて、番組が決定されると、今度は演出部に移って、脚本課では放送台本の作成を急ぎ、交渉課では各出演者に放送を依頼し、藝能課では放送局専属の俳優や音楽部員にそれらの配役を行い、作曲の依頼や楽譜の整備などをいたします。こうして、各番組の準備がだいたい終ると、それらの番組は演出課の担当演出者の手に移されます。例えばそれが放送劇などの場合には、台本へ演出上の注意を書きこむことから、こまかい配役の決定、放送日時の打ち合わせ、本読み・練習・演技指導・テストまで、すべてその演出者が中心となって仕事を進めて行きます。また多くの場合、放送劇には伴奏音楽や音響効果などを必要といたしますが、この場合は、交渉課や藝能課から派遣されて来る音楽家や効果係ともよく打ち合わせをしたり、適切な指示を與えたりしなければなりません。また、アナウンス課から配属されたアナウンサーとも、放送のはじめのことは、終りのことばの末にいたるまで、こまかい打ち合わせがいられます。こうしてようやくすべての準備が完了した時、はじめてスタジオで演出される運びとなるのですが、またこの演出が容易なものではありません。甲のせりふから乙のせりふへ移った瞬間、激しくとびらをたたく音が聞えるという場合、もし一秒間とびらをたたくきつかけが遅れても、劇の「ま」が死んでしまうのであります。したがって、演出者の頭の中では秒を單位として精密な演出プランが描かれていて、放送の終るまで寸秒も油断はいたしません。しかもどの放

送番組もすべて、必ず三十秒前に、早くもなく遅くもなく、きつかりと終らなければならないのであります。もしも放送の時間が伸びたり縮んだりいたしますと、次の放送時間に食いこんで出演者に迷惑をかけたり、全国のプランに狂いが生じたりするからであります。

以上からだけでも、一つの放送がみなさんの所まで送り出されるまでに、どれだけ多くの手数と口時と、人々の努力と苦心とが拂われているか、ほゞおわかりになったことと思ひます。なおこの上、ニュースを取り扱う報道部の仕事や実況課の活躍などがあります。しかし、これらはすべて番組が放送電波に変えられる以前のことと、これから技術局の仕事が始まります。技術局でも、各部各課の人員がそれらの部署についていて、編成局の人々とはまた別な、技術上の苦心を日夜続けています。ともあれ、日本のラジオはみなさんのものであります。ですから、一部の御用機関であつてはならないばかりでなく、それが内からであれ外からであれ、少数の権力や、個人による圧迫や、宣傳などに左右されたり利用されたりしてはならないのであります。ラジオは、私たちのラジオとして、お互に放送の自主性と独立性を重んじ、言論の自由をしっかりと立ち立てて、新日本の建設と世界平和のため、ますます強く大きく育てあげて行きたいと思ひます。

(南江治郎の文による)

#### 四 リヴィングストーンとスタンリー

##### 一 暗黒大陸の父

世界で最も古い文化の一つは、アフリカ北海岸の一部のエジプトに開けました。また、近代文化の

源となつてゐるギリシアやローマの文化は、アフリカの北海岸一帯にその光を投げかけました。その後、世界文化の中心は、西ヨーロッパに移つたようになりまゝになりましたが、その西ヨーロッパから、アフリカはすぐ近い所にあります。それにもかゝらず、このアフリカ大陸は、海岸地方が世に知られてゐるだけで、その内地の大部分は、まだ探検されずに残つてゐまして、地図の上でも空白になつており、秘密のまゝになつて、暗黒大陸と呼ばれてゐました。

この暗黒大陸を明かすために、十九世紀になつてからいろいろな探検がなされましたが、奥地の方へ踏みこむのは容易なことではありませんでした。それにはいろいろな理由があります。

アフリカは、大部分が熱帯にありまして、そのひどい炎暑が人を苦しめます。それから、北部の廣大なサハラさばくをはじめ、あちこちに旅行に困難なさばくがあります。また、海岸地方や峡谷の多くは、熱病の巢といつてもよいほどであります。それから、猛獣や毒虫がはびこつていますし、奥地の方には、悍猛で危険な土人が住んでゐます。だから、この大陸の探検は、全く命がけの仕事でありまして、実際、多くの探検家がたおれました。

この探検において、暗黒のアフリカ大陸の父と呼ばれてゐる人があります。

それは、ダウイッド・リヴィングストンであります。リヴィングストンは、一八一三年に、イギリスのスコットランドに生まれました。家が貧しかったので、工場で働きながら夜学に通ひ、また熱心にいろいろな書物を読みました。それから医学の勉強をし、次に、宣教師になる修業をしました。未開の人々のために、キリスト教の傳道に生涯をささげるともりていたのでした。そしてついには、一八四〇年の末、暗黒大陸のアフリカへ向かつて、宣教師として出発しました。

その後のかれの生涯は、もうアフリカと切り離すことはできません。かれの第一の仕事は、アフリカの野蛮な土人たちを教化することでありました。次には、当時アフリカで盛んに行われていた奴隷賣買の悪風を防止することでありました。それから第三に、アフリカ内地の地理を探索することでありました。それらのりっぱな仕事とそのけだかい人格とのために、かれはアフリカの父といわれるようになったのであります。

かれの功績で最も目につくのは、やはりその探検でありまして、アフリカ探検はかれによつて非常な進歩を見ることになりました。

かれは最初、アフリカの南端に行き、それから内地へとはいつて行きました。一八四九年には、カラハリの大きばくを探りました。一八五四年には、ザンベジ川の上流地から土人の従者を連れて、西海岸のロアンダに出ることに成功しました。それからまた内地に引き返し、こんどはザンベジ川をくだつて、かれがヴィクトリア瀑布と名づけた大瀑布を過ぎ、なお川沿いを進んで、一八五六年、東海岸のキリマネに達しました。これがヨーロッパ人による最初のアフリカ横断であります。

それからかれは、ちよつとイギリスに帰りましたが、一八五八年にはまたアフリカに向かい、六年の間、東部アフリカの内地で、土人の教化をしながら方々を探検して、たくさん発見をしました。そして次第に、この暗黒大陸の内部の姿が明かされるに持ち出されることになりました。

一八六六年、かれはまた第三回の探検旅行のため、アフリカの東海岸のザンジバル港へやつて來ました。もう五十三歳にもなつておりますのに、悪疫や猛獣や蛮人の住む土地に奥深くはいりこもうとしたのです。そして今度は、ナイル川の水源地を調査するという特別の任務も帯びていました。

このナイル川は、アフリカの中部から北へ流れ、エジプトの平野を通って地中海に注いでいる有名な大河であります。古代エジプトの文化はこの川の沿岸に起りましたし、エジプトの豊かな平野はすべてこの川に養われていますし、エジプト人はこの川を父として崇拜しておりました。そしてこの川の水源は、昔からいろ／＼な人によって調べられましたが、まだ明らかになっていませんでした。数年前に、スビークの探検によって、ヴィクトリア湖がだいたいのナイル川の水源とされていましたが、その確実な調査はまだできていませんでした。

そこで、この地方の山脈のありさまを調べ、ナイル川の水源地を探り、動植物の研究などを目的に、リヴィングストンは、ザンジバル港の南方のロヴーマ河口へ行き、川をさかのぼって奥地へと進みました。一八六六年三月末のことで、雑多な土人三十余人を引き連れていました。

ところが、それよりリヴィングストンの消息は絶えてしまいました。そしてイギリスではもちろんのこと、ヨーロッパの人々が次第に心配し出しましたところ、十二月のある日、リヴィングストン一行に加わっていた土人九名が、突然、ザンジバルに現われまして、リヴィングストンをはじめ一行の者は、みなニャッサ湖の西方で蛮人に殺されてしまい、自分たちは密林の中に逃げこんでようやく助かったのだと、言いふらしました。

この話は、どうもほんとうらしく思われました。けれど、イギリスの地理学協会ではそれを疑って、ヤング大佐に調査を命じました。大佐はアフリカに来て、さまざまの苦心の末、翌年の夏、リヴィングストン一行が生きていることを確かめました。かれはリヴィングストンにめぐり会うことはできませんでしたが、その一行が無事であることを知り、あの土人たちは途中で脱走したのだと

いうことを知りました。

その後とぎれとぎれではありますが、リヴィングストンの消息はまた傳わって来るようになります。一行の食糧は乏しく、病気になる者が多く、物品を盗んで逃亡する者も出て来、凶悪な蛮人に出会うこともあり、リヴィングストン自身も幾度か病気になる、そのほかいろ／＼な困難の中で、探検は続けられていました。かれはニャッサ湖からタンガニーカ湖へ進み、モエロ湖やバングエオロ湖まで探りました。しかし、その長い間のかんなんのために、かれのからだも次第に弱って来まして、タンガニーカ湖の、東北岸のウジジという、アラビア人の隊商が集まる町まで、何度か引き返さなければなりませんでした。

そのウジジから、一八六九年五月三十日に出された手紙を最後に、かれの消息は再びぼつたりととだえてしまいました。この二度目の消息不明は、大きな不安の念を與えました。イギリスをはじめヨーロッパじゅうにそのうわさは廣まり、世間の注意を引きました。いくら待ってもなんの消息も得られませんでした。

アフリカの父リヴィングストン、三十年間もアフリカの暗黒と戦い続けて来た偉大な探検家、その人の安否が、今や全くなぞとなったのであります。多くの人々はかれの死を信ずるようになりました。

## 二 感激の対面

一八六九年十月、アメリカのニューヨーク「ヘラルド新聞」の主幹ベネットが、フランスのバリに滞在して、リヴィングストンが行くえ不明になったことを聞き、捜索隊を出そうと考えました。かれは以前からリヴィングストンに敬服して、多くの人々がもうリヴィングストンのこと

をあらかじめかけていますのに、必ずまだ生きているに違いないと信じていたのであります。

ところで、この捜索は容易なことではありません。ベネットはいろ／＼考えました上で、スタンリーという社員を選ぶことにしました。

このヘンリー・モルトン・スタンリーは、一八四一年、イギリスのウェールズの片いなかに生まれ、苦しい少年時代を過ごしてから、アメリカ通いの汽船のボーイとなり、アメリカでスタンリーという商人の養子となったのでした。

その後、南北戦争に従軍し、次には水兵となつて、実地にいろ／＼なことを学び、また独力で勉強もしまして、しまいには新聞記者となり、ニューヨーク・ヘラルド新聞社にはいりました。イギリスがアフリカのアビシニア討伐を始めますと、新聞社の特派員となつてアフリカに渡り、次いで、イスパニアに内乱が起りますと、そこへ派遣されました。そしてイスパニアのマドリッドに滞在しています時に、パリにいるベネットから電報で呼び寄せられたのでした。

ベネットは、スタンリーの元氣な姿を見て、すぐに言い出しました。

「実は、きみもかね／＼聞いているだろうが、アフリカで再度行くえ不明になつたリヴィングストンのことだ。ぼくの考えでは、リヴィングストンはまだ生きていると思う。たとい死んでいるにしても、あれほどの偉人の最期を、そのまゝにしておくということはない。そこで、リヴィングストンの捜索隊を出そうと思うのだが、この隊長の役目をきみに引き受けてもらいたいのだ。きみならきつとやれると思う。費用はいくらでも出すから、ひとつほねおつてみてくれないか。」

スタンリーはしばらく考えてから、答えました。

「お引き受けしましょう。」

そこでベネットは、万事をスタンリーに任せることにしました。

スタンリーは深く決心しました。そしてひそかに、アフリカ内地のことをできるだけ調べあげ、なお、アフリカ旅行の経験のある人々の話を聞いたりして、いよいよ一八七一年一月に、アフリカ東海岸のザンジバル港へやって來ました。

こゝでかれは非常な苦心をして、捜索探検隊を組織しました。その中には、ふたりの白人がおり、通訳もあり、またかつてスピークの探検に同行して、ナイル川の水源地附近を旅したことのある五人の土人もおりました。重要な品物としては、食糧・炊事用具・テント・小舟・衣服・毛布など。次に土人の酋長への贈り物や交易品としては、ロシア・キャラコ、しんちゅうの針金、首飾りのガラス玉など。それから武器には、長短の小銃、剣ややりなど。なお、二頭の乗馬と二十七頭のろば。それから対岸のバガモヨ港で、荷物運搬の土人を雇いました。

かくて、この一隊は総勢百九十二人で、五組に分かれて順次にアフリカの内地へ向かつて進みました。ところで、リヴィングストンがどこにどうしているやら、さっぱり見当が付きませんでした。しかし、最後のたよりがウジジから來たところをみると、そこへ行けば何かの手がかりが得られるかもしれませんので、スタンリーはまずウジジへ突進することにしました。

この旅行は困難をきわめました。また雨期が去らなかつたので、谷川の水はあふれ、あちこち沼沢をつくっていました。毒ありや毒ばちやその他の虫が、晝となく夜となく一行を悩ました。マラリアにかゝる者も多くなりました。スタンリーもその病氣にかゝつて、高熱のために意識がぼんやりし

たこともしばしばでした。うまやろばもたおれるものが出て来ました。そして、行けども行けども荒野と沼と密林で、し、やわにも出会います。道は少しもはかどりませんでした。

バガモヨの海岸から出立したのが三月二十一日のことで、それから数箇月の間に、逃亡する者や病死する者があい次いで出て来て、わずかに五十六人となってしまいました。白人のひとりには病死し、他のひとは衰弱してもう進めませんので、人夫にかつがれて途中から引き返しました。

道程の七分めあたり、ウニャンエンベの部落まで来ますと、その先でアラビア人と黒人との間に激しい戦いが起つていて、通行は危険となりました。スタンリーはその部落に多くの荷物を残しておき、遠いまわり道をして、密林の中を分けて進みました。心細い困難な旅で、一行のうちの元氣な者も次第に氣力がくじけて来ました。

しかし、困難が増せば増すほど、スタンリーの決心は固くなりました。リヴィングストーンを捜し出すことは、もう新聞社の仕事ではなく、かれ自身の心からの仕事となり、一身になつてゐる使命と思われるのでした。あくまで突進しようとかれは自身に固く誓いました。

幸いなことに、かれのその決心に答えるかのように、アラビア商人の一隊から、うれしい手がかりが得られました。ウジジにひとりの白人がいたというのです。

その白人こそおそらくリヴィングストーンに遠いありません。スタンリーは急に暗夜に光明を見出したようなこゝちで、一同を励ましながら進みました。

十一月十日、川に沿つてくだり、丘の上に出ますと、向こうに湖水が見えました。タンガニカ湖です。なお進むと、すぐ目の下にウジジの町が現われました。一行は歓声をあげました。スタンリー

は到着を祝つて、小銃で空砲をうたせました。

一行が町にはいると、銃声に驚いてゐる土人たちが、騒ぎ立ちながら集まつて来ました。その中のひとり、スタンリーに近づいて来て、「今日は。」と英語で言いました。スタンリーは驚き、また喜んで、よく尋ねてみますと、その男こそ、リヴィングストーンに長い間仕えている忠僕で、スーシという者でありました。スーシは狂氣のように駆け出して行きました。スタンリーはその後を追いました。やがて、そこにひとりの白人の姿が見えました。

その人は、せいが高くやせていて、疲れているようでした。金モールを巻いた帽子をかぶり、その下から白い髪の毛が見えており、赤い上着を着、灰色のズボンを着けていました。まさしくリヴィングストーンに違いありません。

スタンリーは、走り寄ろうとしましたが、お、ぜいの土人が立ち並んでいるのにちよつと氣おくれがし、また無礼なことをしてはならないと思い、靜かに進んで行つて帽子を脱ぎました。

「リヴィングストーン博士ではありませんか。」

その声は感動にふるえました。

相手の人はかすかにほおえんで、帽子に手をかけて答えました。

「そうです。」

スタンリーは帽子をかぶり、相手が帽子から手を放すのを待つて、その手を強く握りしめて叫びました。

「あなたにお会いすることができたのを、私は神に感謝します。」

リヴィングストンはそれに答えました。

「私も、こゝにあなたをお迎えすることになったのを、深く感謝します。」

それは、つゞしみ深い、おもしろい会見で、いかなる身振りや叫び声にも増した深い感激のこもったものでありました。

### 三 恵まれた湖水

ウジジは中央アフリカでも早くから開けた町で、一方にはアラビア人が住み、他方には土人が住んでいます。附近からさまざまの商品が集まって来て、その交易はにぎやかです。タンガニカ湖岸には、土人の丸木舟がたくさんつないであります。

こゝの狭苦しい家の中で、リヴィングストンとスタンリーとは、互にしみじみと長い間語り合つたのでした。スタンリーは、まず搜索の旅に出た次第を話し、リヴィングストンは、長い間の探検旅行のいろいろな出来事を話しました。

リヴィングストンがなめたかんなん辛苦は、ことばにも盡くせぬものがありました。ニャッサ湖附近の地勢を調べてから、タンガニカ湖の南岸にたどり着くまでには、絶食同様の日々を過ごしたこともありましたし、雨の中ではほとんど一行全員が病氣になつたこともありました。何よりも困つたのは、変心した従者が薬品の箱を持ち逃げしたことでした。しかし、かれはなお探検の旅を続け、モエロ湖やバングエオロ湖などの附近一帯を調査しました。そのうちにかれは肺を病み、血痰を吐くほどになりました。そしてアラビアの商人に助けられ、人の背におぶさつたり、担架に乗つたりして進みました。静養のためウジジに來ますと、ザンジバルから送られていた必需品は、もうおゝかた盗まれました。

てしまつていました。かれは少しく健康を回復しますと、また探検の旅に出で、ナイル川水源地帯を实地に調査しようとしたが、また病氣に冒され、衰弱がひどくなりました。その上、凶猛な蛮人に襲われて、幾度か危険な目に会い、蛮人の投げやりが首のそばをかすめたこともありました。ようやくウジジに引き返してみると、荷物を預かつていたアラビア人が、もうリヴィングストンを死んだものと思ひ、その品物の大部分を賣り拂つていました。それでもかれは、なお強い精神力を失わないで、粗衣粗食のうちにくらぶに日を過ごし、ザンジバルから送つてくれる三度めの荷物の到着を待つて、更に探検を続けるつもりでいたのです。

リヴィングストンの消息が絶えてしまつたのは、手紙を託されたアラビア人が、その手紙をみな途中で捨ててしまつたからだということがあとでわかりました。

リヴィングストンの悲痛な話を聞きながら、スタンリーは、これまでかつて覚えたことのないほどの感動に打たれ、リヴィングストンの偉大な人格にすっかり感服しました。

そして、心の底からリヴィングストンに結びつけられたスタンリーは、数日休養するともう、リヴィングストンを助けて、タンガニカ湖北端の探検へと出かけたのであります。

ふたりは土人の會長から大きな丸木舟を借りました。そして十六人のこぎ手、ふたりの炊事係、ふたりの案内人に乗せ、必要な品物を十分に積みこんで、ウジジの岸から北へ進みました。

アフリカの中部奥地に細長く南北に横たわつてこの大湖水は、地理学上たいへん興味深いものであります。その風景の美しさもまた格別であります。巨大な樹木と深緑の草におゝわれた山が湖岸までそそぎを引き、絶壁をそばだたせ、みさきを突き出し、夢のような美しい景色が次々にひらけて

來ます。熱帯地の豪華な花は林の中を五色に染め、その芳香は湖面まで漂つて來ます。附近には、さまざまな鳥が飛びまわっています。それはまるで樂園のようです。

これほどの華麗な風景を、スタンリーはかつて見たことがありませんでした。三十年間アフリカの大自然に親しんだリヴィングストンでさえ、幾度か感嘆の声をあげました。

湖水にはたくさん魚がいて、土人たちはほとんど漁を仕事としています。湖岸の平地には、果樹が植えられ、とうもろこし・らつかせい・さつまいもなどが作られています。野生の木からも、油や果実がとれ、谿谷の大木は丸木舟の材料になります。しかし、美しい景色と豊かな物産に恵まれているこの地方も、奴隷賣買者の手先となつていくアラビヤ人に、しばしば荒らされることがありました。奴隷賣買に反対してたゞかつて來たリヴィングストンとともに、スタンリーもかれらに対して深い憤慨を覚えました。

目を重ねて北へ進むと、湖岸の土人は次第にこうかつて凶暴なものが多くなりました。一行の全員には十発ずつの彈丸が配られました。

アフリカの内地では、旅行者は、たいいてい部落で、一種の通行税として贈り物を要求されますし、また物品交易が要求されます。金銭は小さい役に立ちません。それ故、食糧や他の品物は、旅行者にとっては最もたいせつなもので、その使用については、人員や日程から割り出して、くわしい予定を立てねばなりませんし、もしそれを狂わせると、恐ろしいはめに陥ることがあります。

ところが、土人たちはこうかつてかけ引きが強く、その上、時間のことなどは頭がないので、贈り物にしても交易にしても、その交渉がのろ／＼と長引いて、容易にまとまりません。

そういう場合、リヴィングストンは、実に悠長にかまえて、少しもかんしゃくなど起きず、無理をせず有利な結末をつけるのでした。スタンリーははじめじり／＼しましたが、後にはリヴィングストンの交渉のしかたに興味を覚えて、いろ／＼教わるようになりました。

ムクングという部落に行きますと、土人は贈り物として綿布を要求しましたが、その贈り物の分量が決定したのは日没後のことでした。すると土人は、その返礼の贈り物を、もう日が暮れたからといつてごまかそうとしました。リヴィングストンはこ／＼笑いながら、ひつじをよこさないかと言いました。そしてようやくひつじ一匹を手に入れ、景品として棕櫚酒シロ一つほをもらいました。

新鮮な子ひつじの肉は、久しぶりのごちそうでした。一同は酒盛りをする氣持になつて、甘いごく強い棕櫚酒をもちたゞか飲みました。

その夜、リヴィングストンの忠僕のソーシと、スタンリーの従僕のボンベイとが、丸木舟の見張りをすることになっていましたが、ふたりとも棕櫚酒に酔つぱらつて、ぐっすり眠つてしまいました。そして夜が明けてみると、丸木舟の中はさん／＼に荒らされていました。盗まれた品物を調べてみますと、水深計の糸、五百発ばかりの彈丸ケース、九十発ばかりの小銃彈、麦粉一袋、砂糖のかますなど、大事なものはかりです。景品の棕櫚酒のために、たいへんな損害を受けました。この盜難に、スタンリーは腹を立てましたが、リヴィングストンは平然としていました。

一行の丸木舟は北へ／＼と進みました。恐ろしいわには、大河の河口附近にしかいないことがわかりました。土人の丸木舟の群れが、ゆう／＼と浮かんでいることもありましたが、湖岸には、つりをしたり網を打つたりしている漁夫もいました。水にはいつて遊んでいる子供を、棕櫚の木陰からほおえ

んでながめている母親もいました。

ピカリというところの部落の土人は、強欲で非道だという評判でしたが、夕方その沖を通りかゝると、果たして土人らが岸に出て来て、舟を着けると叫んだり、石を投げつけたりしました。スタンリーは鉄砲をぶっ放してやろうと思つて、リヴィングストンの顔色をうかがいましたが、リヴィングストーンは、無言のうちに不同意を示しました。

その先の方に、びょうぶのような岩の陰に入江を見つけて、そこに露営するため上陸しました。そしてコーヒーのしたくをしていますと、夕暮れに数人の土人が忍び寄つて来て、一行の案内人にぐずぐず話しかけながら、様子を探つて立ち去つて行きました。しばらくすると、また数人の土人がやつて来、次にまた第三の数人がやつて来ては、同じようなことをして立ち去りました。

いかにも怪しいことでした。土人の風習では、暗くなりかけてから訪問をするという事はないものですし、夜中に他の小屋のほとりをうろつくのは、害心があるのだとされています。それで、三度にわたる訪問は、襲撃の偵察に違いないと考えられました。

それにまたもや、第四回めの数人がやつて来て、同じことをくり返して行きました。

もう猶予はなりませんでした。ちょうど晩飯も終つたところでしたから、一同は急いで丸木舟に乗りこみ、沖へこぎ出しました。

あぶないところでした。岩の上や砂州の上に、続々と怪しい人影が立ち現われました。部落じゅうの者をかり集めて掠奪に來たのです。かれらは沖へ去つて行く舟に向かつて、いろ／＼な叫び声を投げかけました。

スタンリーはかれらに銃弾を見舞おうと思つて、リヴィングストンの顔色をうかがいましたが、その時もまた、平和と愛との高潔な心情を読みとつたのでした。

次のマガラという部落の土人は、リヴィングストンの心情に應ずるかのようになり、たいへん温厚でした。一行は、その部落のそばにテントを張つて休みました。やがて多くの土人が集まつて来て、珍しうにながめて立ち去りましたが、その中にいたひとりが、午後になると、きらびやかに着飾つて、多くの従者を連れてやつて來ました。それが酋長で、威儀を正して公式の訪問に來たのです。ぞうげの飾りをたくさん着け、しんちゆうの胸環をまとい、鉄の輪を足にはめていました。その顔は他の者よりも美しく秀でていて、笑うたびに水晶のような歯がちら／＼見えました。

こゝでは品物の贈答も礼儀正しくなされました。

その先の部落では、隣の部落との間に戦争が行われていました。実にのろ／＼とした戦争でした。一方が奇襲をして、家畜数頭を掠奪したり、人間を二、三人殺したりして引き揚げますと、今度は他の一方が、数日あるいは数十日後に機会を見て奇襲し、だいたい同じようなことをして引き揚げます。そしてそれがくり返し続けられます。そういうのがアフリカ土人の間の普通の戦争で、堂々と大襲撃をやつて激戦するという事は、きわめてまれであります。

そののろ／＼とした戦争をしている部落へ、リヴィングストンの一行はやつて行きました。そして、やりやこん棒やおのなどを持つている土人に取り囲まれましたが、やがて、酋長から親切に待遇されました。

そのころ、スタンリーは熱病にかゝつて、頭の割れるような痛みと、からだのやりばのないような



けだるさとのうちに、意識もぼんやりしてしまいましたけれども、始終リヴィングストンの姿がそば近くに見えましたし、その手が熱い額や手足に触れてくれるのを感じました。その慈父のような、やさしい慰めと介抱とに対して、スタンリーは感謝の涙にぐれました。

それから一行は、ついにタンガニーカ湖の北端に達しました。その部落の酋長ルヒンガは、いつも穏やかなほおえみをたゞえている老人で、もう百歳になると、自分で言っていました。かれはその辺の地理にたいへんくわしく、いろいろなことをリヴィングストンたちに教えてくれました。

リヴィングストンの考えでは、タンガニーカ湖の北端に続いているルシジという川が、あるいはナイル川の上流となっているのではあるまいかということでした。もしそうだとすれば、ナイル川の水源は、ヴィクトリア湖よりも更に南方のタンガニーカ湖となるはずでした。しかしこのルシジ川が湖水へ続いているあたりは、縦横に分かれている無数の小さな流れの集まりであって、川全体として湖水から流れ出ているものやら、または湖水に流れこんでいるものやら、さっぱりわかりませんでした。酋長ルヒンガの言うところによりますと、ルシジ川はタンガニーカ湖に流れこんでいるのであり、ルシジ川の源は、キヴーという小さな湖水であるとのことでした。

リヴィングストンとスタンリーは、それを实地に調査してみました。そして、ルヒンガの言ったことが正しいとわかりました。ルシジ川はまさしくタンガニーカ湖へ流れこんだのであり、したがってまた、ナイル川の水源ではありませんでした。

リヴィングストンの予想ははずれました。しかし、今度の探検の目的は十分に達せられました。その上、美しいタンガニーカ湖の船旅は、全体として、アフリカ奥地ではめったにない楽しいものであり

りました。

一行は十二月十一日、無事にウジジに帰り着きました。

#### 四 別離と任務

ウジジには、幾つもの手紙や電報がスタンリーを待っていました。ザンジバルのアメリカ領事から回送して来たものでした。そしてスタンリーは、リヴィングストン搜索の目的を果たしたからには、ひとまずヨーロッパへ帰って行かねばなりませんでした。

ところで、リヴィングストンはどうしたものでしょうか。スタンリーはリヴィングストンに会ってからまもなく、將來のことについて相談しました。リヴィングストンはもう数人の従者だけしかおらず、物資もわずかしかありませんでした。それらのものは、スタンリーの力で補うとしましたが、リヴィングストン自身の健康は、これ以上、とうてい探検を続けられそうもありませんでした。それで、一時帰國して静養し、十分に健康を回復してから再攀されるようにとスタンリーはせつに勧めました。しかし、リヴィングストンは承知しませんでした。ナイル川の水源をはつきり探査するまでは、たとい死んでも帰國しないと、固い決心を示しました。

そこでスタンリーは、次の考案を持ち出しました。それは、リヴィングストンを護衛してウニャンエンペの部落まで行くということです。そこには、スタンリーがウジジへやって来る途中、いろいろな物品や銃器や小舟やテントなどを残して来ています。それをみなリヴィングストンに提供し、スタンリーは大意で海岸まで出て、五、六十人の従者を雇い、食糧その他の必需品を持って来させよう。それにまたウニャンエンペの部落は、ウジジよりも文化的に開けていて、静養にも便利に違いないのです。

この考えには、リヴィングストーンも喜んで賛成しました。タンガニーカ湖北端への探検は、いわばふたりの記念の旅でした。予定はきまっています。ウジジで数日休んでから、十二月十七日、スタンリーはリヴィングストーンを護衛しながら出発し、来た時と同じ困難な道を、五十日余りかゝって、ウニャンエンベの部落へ着きました。不幸なことには、スタンリーが預けておいた荷物は、おゝかた盗まれてしまっていました。しかし、もつと悲しいことは、月日が早く過ぎて行き、スタンリーはもうリヴィングストーンと別れなければならなくなったことでした。

ふたりの間は、友情というよりも師弟のような愛情で結ばれていました。スタンリーはこの時三十一歳、リヴィングストーンは五十九歳になっていました。そしてこの老探検家の高潔な人格は、この若い新聞記者に深い影響を與えていました。

三月十四日にスタンリーは出発することになりました。その前の晩になつても、リヴィングストーンはスタンリーを引きとめたいような様子でした。スタンリーも長く居残っていたい思ひでしたが、海岸へ出てリヴィングストーンの探検隊を整えてやるという重大な任務のことを考えました。探検はいつでもできるが、人の体力や生命には限りがあります。リヴィングストーンが一應帰國するのを承知しないのも、そのことを考えていたからでありましょうか。悲痛な感慨のうちによくも眠れない夜は、早くも明けかゝりました。もう荷物は戸外に持ち出され、いそがしい出発の準備がされていました。朝食の食卓に着いても、スタンリーは胸がいっぱいで、なんにもたべたくありませんでした。リヴィングストーンも食欲がないようでした。

出発の予定は五時でしたが、心残りがしてぐずぐずしているうちに、もう八時になりました。スタン

リーが思いきつて立ちあがると、リヴィングストーンも立ちあがりました。

「少しお送りしよう。」

「ありがとう。さあみんな、出かけようか。」

一同は旗を先に立てて出かけました。しばらくして振り返ると、今まで住んでいた家、そしてリヴィングストーンが居残る家は、林の中にさびしく立っています。それもやがて小さくなり、見えなくなりました。周囲の丘陵は思ひ出の深いものばかりです。従者らは歌をうたい出しました。スタンリーはリヴィングストーンと並んで、ゆつくり歩きながら言いました。

「あなたの遠大な計画は、私にはわかりませんが、ナイル川の水源をはつきり探るまでは、帰國しないおつもりでしょう。しかし、あなたが満足された時には、本國へ帰って、みんなを喜ばせてやってくださいよ。」

「全くその通りだ。」

そしてリヴィングストーンは、探検の予定をいろいろ話しました。

「まあ一年半はかゝるだろう。」

「それでは、予定が狂う場合のことも考えて、人夫たちは、こゝへ到着の日から向こう二年間ということにして、雇っておきましょう。」

「それはたいへん結構だ。」

「では、これでお別れしましょう。神は、これまで常にあなたを助けてくださったように、今後もあなたを助けて、安全に故國へ導いてくださるでしょう。」

「さみたちも、神が安全に帰してくださるでしょう。さよなら。」  
「さよなら。」

ふたりは固く握手をしました。スタンリーは、張りつめている氣持がくじけないうちに別れようとなりましたが、リヴィングストンの忠僕のスーシやチューマが、かわるがわる握手したり、抱きついたりましたので、たまらなくなり、わざと大声に別れを告げて、従者らをせきたてました。もうめいしいふるまいをする場合ではありません。たゞ一路、進むだけです。

そしてスタンリーはウニャンエンベの部落をあとにして、困難な道を一同を励ましながら、五月六日に、海岸のバガモヨに到着しました。

バガモヨでは、イギリスの地理学協会から派遣された捜索隊が、出発の準備をしている最中でした。しかしかれらは、リヴィングストンの消息をスタンリーから聞いただけで、旅の困難を恐れて、内地へ向かうのを中止しました。

そこでスタンリーは、ひとりの老練なアラビア人を雇って先導とし、五十七人の人夫に重要な物資をかつかせ、五月二十日にバガモヨを出発させて、自分の任務を果たしました。

その後スタンリーは、便船を得てヨーロッパへ帰りました。かれが傳えた話は世人を驚かし、はじめのうちは、信用しない人が多かったほどでした。

#### 五 偉人に忠僕

リヴィングストンはウニャンエンベの部落に残って、ひたすら次の探検の準備にかかりました。その間にも、附近の地理や動植物を調べました。また土人の教化にも努めました。それから、奴隷廃止

を世界の人々に向かって演説する大論文を書いて、ニューヨーク・ヘラルド新聞に送りました。

そのうちに、スタンリーがバガモヨから仕立ててくれた一隊が八月十四日に到着しました。大探検の計画はもう立っています。最後の準備をして、いよいよ八月二十五日に出発しました。目的はナイル川水源の調査であります。そのためにはまず、バングエオロ湖附近にまで探検を進める予定でした。リヴィングストンの健康はもう回復し、用意も十分でした。しかし、旅は困難をきわめました。乾ききった燃えるように暑い密林にさしかかると、その中を十日間も進んだ時には、リヴィングストンをはじめ、一行の多くは熱病にかかりました。

それでも十月八日にはタンガニーカ湖に出ました。そして東岸に沿って南へ進みましたが、困苦はますます／＼はなはだしくなりました。長年引き連れていた一頭のろばは、毒ばちに襲われて死にました。道案内人を雇えば、いじの悪いことをして食糧が得られないような所へ一行を引きこみました。

十二月になるともう雨期にはいつて、日夜しと／＼と降り続き、いたるところ、どろ田のようでした。この雨のために、天文の観測も地勢の測定もできなくなりしました。

バングエオロ湖に注いでいるチャンベジ川のほとりで、森の中に珍しい花が咲き乱れているのに出会いました。そのいろ／＼な色とかおりとは一行を少なからず慰めてくれました。

しかし、この地方では土人がひどくこころがつかつてした。ある部落では、物品と食糧との交易を承諾しておきながら、なか／＼実行してくれず、三週間もだら／＼と交渉が長引きました。

旅はなか／＼はかどりませんでした。もう年を越して四月のころになると、リヴィングストンの健康はひどく衰え、陽出血を起して、ろばに乗ることもできず、担架に乗って進みました。幾分元氣つ

いては、またろばに乗ってみて、落馬して氣を失ったこともありました。

それでも、かれは常に探検のことを忘れず、附近の地勢を土人に尋ねたり、道のりを調べたりしました。四月二十六日に簡単な日記をつけたきり、翌日はもうベンを執る力もありませんでした。

四月二十九日の夕方、一行はバングエオロ湖南岸のチタンボという部落に着きました。その小屋の中にベッドを設けて、リヴィングストンはその上に寝かされました。

翌朝、部落の酋長が訪れて來ましたが、リヴィングストンはもう話をすることもできませんでした。一日寝たきりで、時計をそばに持って來させ、それからしきりに附近の地理を知りたがっているようでした。その夜の十二時ごろ、かれは忠僕スーシを呼んで、水と藥箱とろうそくを持って來るよう命じ、二つのコップに水をつがせました。

「よろしい、あちらへ行っていないさい。」とかれは言いました。

曉に近い四時ごろ、かれの身近に仕えていた子供の従者が、スーシに告げました。

「來てください。なくなられたようです。」

スーシをはじめ数人の者が、急いで屋内にはいつて行きました。

ろうそくの火はまだともっていました。リヴィングストンはベッドに寝てはいないで、そのそばにひざまずき、両手で頭をかゝえ、額を毛布にうすめて、祈禱きたしているかのようでした。一同は無言のままそこに立っていました。かれがあまりじつとじていますので、靜かに近寄って手を当ててみますと、その額はつめたく、ほおもやはりつめたくなっていました。かれはもうこの世の人ではありませんでした。

一同は何か異常なものを心に感じて、黙ったまゝたゞずんでいました。そして一八七三年五月一日の夜明けの光がほのくゞとさして來ました。

この莊嚴な最期をとげた偉人には、またそれにふさわしい忠僕たちがいました。一八六六年にザンジバルを出てからずっとかれにつき従っているスーシとチューマとが、一行の中心となって、万事についてさしずしました。

かれらはリヴィングストンの遺骸を本國に送り返すことに決定しました。そして衆人の面前で、かれの所持品を調べていち／＼書きとめました。それからあらたに祭壇を設けて遺骸を安置し、その臍を大木の根もとにうめ、幹を削つて、英語の書ける従者にリヴィングストンの姓名と誕生日と死亡日とを彫らせました。次に、部落の酋長はじめおゞぜいの者を加えて盛大な葬式をし、死体を十日余り天日に干し、香料を詰めて布で巻き、モヨンガという木の皮をかぶせ、更に帆布で包み、前後からなえるようにしました。

一行は死体を護衛して、はるかに東海岸をさして出發しました。その困難な道のりを、かれらは非常な忍耐力で続けて行きました。

これより先、スタンリーからいろ／＼と傳えられたリヴィングストンの消息は、またもやとだえていました。

それでイギリス本國では、東海岸と西海岸とから搜索隊を送りました。東海岸からののは、地理学協會によるカメロンの一隊でしたが、それがウニャンエンベの部落にいる時、スーシらの一行と出会いました。カメロンはそこで死体を受け取るうとしましたが、スーシらはそれに應ぜず、どこまでも主

人の死体と所持品とを守り続けて、ついに海岸のバガモヨまで、チタンボから九箇月ほどの苦しい旅を続け通しました。その上、かれらはイギリス本國へまでも、ともをして行きました。このスーシやチエーマたちアフリカ人の忠実な美しい行いは、アフリカの父たるリヴィングストンの徳を慕つてのことでありました。

リヴィングストンの遺骸は、ザンジバル港から汽船でイギリスに運ばれ、一八七四年四月十八日、盛大な國葬によつて、ウェストミンスター寺院に葬られました。この時、スタンリーは悼詞を読んだのであります。

## 六 ナイル川の水源

スタンリーは、リヴィングストンの靈前に悼詞を読んで、アフリカでの生活をまご／＼と思ひ浮かべ、蛮地にたおれたリヴィングストンの心情を思いやつて、暗涙にむせびました。その靈を眞に慰めるものは、盛大な葬儀でもなく、りつばな墓標でもなく、その事業を完成することよりほかにありません。スタンリーは、暗黒アフリカの開發に一身をさしげようと決心しました。

リヴィングストンが最後に企てたのは、ナイル川水源の实地踏査でありました。この水源問題は、昔からいろいろ論議され、一八五八年になつて、スピークがヴィクトリア湖を探つてほしいの解決をつけましたが、それ以上のことはまだ秘密に包まれていました。

スタンリーはまずこの秘密をあばこうとしました。準備として、アフリカに関するあらゆる文書をあさり、十分な計画を立てました。その計画は大きくなり、ナイル川の水源はもとより、全大陸の地勢・氣候・動植物・人種・風俗などをくわしく調べ、なおリヴィングストンの志を継いで、土人教化

と奴隷賣買防止にも力を盡くそうとしたのです。

かれのこの企ては、イギリスのデリー・テレグラフ新聞社とアメリカのニューヨーク・ヘラルド新聞社から、十分の後援を得ました。そして参加者の申しこみも無数にありましたが、スタンリーは、その中から同行者としてわずかに三人の者を選びました。

一八七四年十一月十三日、かれはザンジバル港で五百五十六人の大探検隊を組織して、バガモヨからアフリカ内地に踏みこんで行きました。はじめのうちは旅行も順調に進みましたが、やがて雨が多くなり、道も難澁となり、病人や落伍者が次々に出て來まして、同行の白人のひとりはずいに死にました。そしてこの間、凶悪な土人も戦わねばなりませんでしたので、この旅行はなか／＼容易なことではありませんでした。

かくて翌年の二月二十七日、一行はヴィクトリア湖の南岸に達しました。そのカゲヒという部落で、會長のカズーマからにぎやかな接待を受けました。スタンリーもぜいたくな酒盛りをして、一行の者をねぎらいました。またこのおゝぜいの一隊が來たことを聞き傳えて、あちこちの部落の者が物品交易に集まつて來ましたので、部落はたちまち盛大な市場のようなありさまになりました。

ところが、湖水の周航となると、だれもしりごみしました。會長のカズーマは酒ばかり飲んで、おともすると言いながら、酔いがさめるとけろりとして、湖水への案内者も出してくれませんか。土人たちは行くのをいやがり、一行の人夫たちも水にはいくじがありません。土人の言うところによると、湖水の周航には一年もかゝるそうです。なお、湖水の岸には尾のある恐ろしい蛮人もおり、人をかみ殺す猛犬をたくさん飼つている土人もおり、人間をうしやひつじのように食う人種もいるというので

す。スタンリーはしかたなく、少人数でこれを決行することにしました。かれは組立式の鉄舟を用意していったので、それに乗りこみ、従者の中から十一人を選んで同行させました。そして三月八日にカゲヒから出発しました。

湖の東岸と北岸をめぐるのに、およそ一箇月かかりました。風雨の日もあれば、美しく晴れた日もありました。凶暴な土人に襲われたこともありましたが、風景は非常に変化があつて、おもしろくながめられました。熱帯植物がこんもりと繁っている島がいたるところにありますし、陸にはけわしい岩山がそびえ立っていたり、美しい樹木におゝわれた小山がもりあがつたりしています。岸は岩だらけの所もあれば、森が水に浸っている所もあります。奇妙な服装をしている土人も見えました。また七フィートの長さのとかげもいました。水中にはわにが出没し、かばの大群がいました。全くまる裸で暮らしている土人の部落もありました。

風をよけて島陰にとどまっていますと、四十人ばかりの土人が大きな丸木舟に乗ってスタンリー一行の鉄舟に近づいて来ました。土人たちは、やりやたてをうち振つておどかしました。スタンリーは一同を静かにさせておいて、たゞ平然とかまえて微笑さへ浮かべていました。土人たちはみな酒に酔つていようでした。歌をうたつたり、跳んだりはねたりしました。しまいは一行の品物を珍しうにいじつたり、水夫たちのからだをなでまわしたり、頭をたゝいたりしました。それでも一同がじつとがまんしていますと、土人のひとり石投げ器を取りあげて、非常に遠くまで石を投げて見せました。ひどく酔つているひとは、スタンリーをねらつて石を投げました。石はスタンリーの頭の上をすれすれに飛んで行きました。

いくらおとなしくしていても、きりがありませんので、スタンリーはピストルを取り出して、数発うつて見せました。すると、土人たちはかえるのように水に飛びこんで、丸木舟を捨てて岸の方に泳いで行きました。一同は笑いながら、手招きをして丸木舟を押しやつてやりました。やがて土人たちは、にこ／＼してどつて来て、ピストルの音をまね、がや／＼しゃべりたて、そしてバナナ一ふさをスタンリーにくれました。

北西岸のウガンダ王國の港に着きますと、赤や黒や白の衣を美しく着飾つた群集に迎えられました。旗がひるがえり、太鼓が鳴り、數百発の礼砲が響きました。そして國王のムテサから使者が来て、スタンリーはその案内で、賓客としての正式の謁見を許されました。

ムテサは大勢力を持っている王で、三千人の軍隊を率い、整つた法令でこの地方を治めていました。外國人を排斥せず、いろ／＼文化を取り入れたがつていました。スタンリーはこの王に会つて、キリスト教のことを説き、この地方への傳道の基を築きました。

湖の西岸は危険な所で、その土人たちは凶暴でした。ある島に上陸しますと、土人たちは親しげな様子で一行を迎えておいて、突然その舟を岸に引きあげてしまひ、物陰から數百人の者が現われて来て、やりや弓やこん棒をうち振り、喊声かゑをあげて襲つて来ました。スタンリー一行は冷静な態度でそれを迎えました。かれらはちよつと拍子ぬけがしたようで、何か相談を始めましたので、そのまゝに一同は、舟を水上に押し出して逃げ出しました。

このように、いろ／＼と、所によつて土人の態度が違いますのは、アフリカ内地での特色でありまして、旅行者にとつては、それがおもしろくもあれば危険でもありません。

五月六日、五十日近くかゝつて湖水の周航を終り、一行はカゲヒの部落に帰つて來ました。るすの人々のうち、この瘠地の病氣で、白人ひとりと人夫六人が死んでいたのであります。

スタンリーはかくしてヴィクトリア湖の探検をすませました。湖の地形や廣さもわかりました。湖に注いでいる幾つもの川のことわかり、ことに西方から流れこんでいる大きなカゲラ川こそは、ナイル川の一番上流だということが明らかとなりました。

スタンリーは、更に附近の探検を続け、ウガンダのムテサ王に頼んで多数の護衛兵をつけてもらい、西方のアルバート・エドワード両湖を探り、附近の山脈の模様をも調べました。この探検は一年間ほどかゝり、疲れ果てた一行は、一八七六年五月二十七日、タンガニーカ湖畔のウジジにたどり着きました。ウジジは、五年前の十一月にスタンリーがはじめてリヴィングストンに出会った所で、スタンリーは言い知れぬ感慨を覚えました。リヴィングストンの霊がなほアフリカの地に残っているような氣がして、その靈に対し、祈りと誓いとをくり返しました。

そしてスタンリーは、タンガニーカ湖全部を探検して、その地形や廣さや深さを測り、なお湖に流れ入っている川や、湖から流れ出ている川のことを、綿密に調べました。

これで、ナイル川水源の問題も解決され、その水源地附近はすっかり実地に調査されたのであります。しかし、リヴィングストンの大きな志を受け継いだスタンリーの探検旅行は、これからますます大規模なものとなります。かれはその年の末、西方のニヤングーエに出で、そこで、本隊百五十二人と應援隊四百人の探検隊を組織し、暗黒大陸の西半球を照らす一本のたいまつになろうという決心で、西部の祕密境に突進し、壯烈なコンゴ川くだりの大冒険をなすのであります。この横断旅行の後、

更にはたび／＼の探検隊や遠征軍を指揮するなど、一八九〇年まで、かれはアフリカ大陸の開発に奮闘しました。  
(豊島興志雄著「世界探検物語」による)

## 五 春を呼ぶ

これは、「よびかけ」として演出もできるし、また「詩劇」として演出することもできる。いずれにしても、せりふをはっきり表現することがたいせつである。口ごもったり、早くなったり、声が低くて聞き手に届かなかつたりしては、失敗である。文章の意味に即して、何度も何度も「ことば」の言い方をくふうして行かなくてはならない。その練習に当たっては、くり返したり、やりなおしたりして、おっくうがらずに行きたい。本課の学習によって、みんなが少しでも「ことば」の言い方がらくになり、りっぱになり、聞く人たちにことばの美しさや力を感じさせることができたとしたら、成功である。

もし、しぐさや動作を加えるような時には、どんなのが一番そのことばにふさわしいか、みんなを考えて、次第に練りあげて行く。

少年一「長い冬だった。

北風やふぶきが待ちかまえていて、

ぼくらをつかまえた。

だが、ぼくらは、冬を恐れなかった。

冬に負けなかった。

五 春を呼ぶ

胸を張って飛び出し、  
北風やふとぎと戦った。  
そうしてぼくらは勝った。  
強くなった。」

少女一

「そうです。」

小鳥もわたしたちと同じ、

花もわたしたちと同じ、

光の洪水の中に、

舟を浮かべ、

帆をあげ、

小鳥を乗せて、

走りましょう。

少年一

「ぼくたちは春を迎えに来たのだ。

希望と歓喜に満ちた春を。」

少女二

「天の一本ばしごをおりて来る春を迎えに来ました。」

少年一

「暗いきびしい季節を突き抜けて来たぼくたち、  
ぼくたちは

てのひらに受けきれない光を、

今こそ、からだじゅうに浴びようとしているのだ。」

少女一

「わたしの髪にも、

光はリボンのように揺れてるでしょう。」

少年一

「光っている。

揺れている。」

少年二と少女二、登場。

少年二 「きみたち、もうこゝへ来ていたの。」

少年一 「あゝ、きみたちも来たね。じっとしていらなかったのだ。」

少女二 「わたしたちもそうでした。みんなもあとからやって来ます。」

少年一 「みんな、春を迎える準備はすんだのだね。」

少年二 「できたとも。」

少女一 「すっかりできました。」

少年二 「ぼくは風のように大空が飛べそうな気がする。」

少女二 「私にはちょうのような羽。足が、踊りたくてふるえる。」

少女一 「さあ、もう春のお使が来るころでしょう。」

少年一 「むかし、小学校の一年生で習った『春をむかえに』をやってみたくなった。」

少女一 「そう、やってみましょう。」

四人で、おもしろく「春をむかえに」の「よびかけ」を始める。



そこへ佐保姫登場。

少年二 「春は手品師だ。」

冬の世界へおりて来て、  
手を開く。

たゞそれだけで花が咲く。」

佐保姫 (にっこり笑って手を開く。花が咲く。)

少女一 「ほら、たんぼほ。」

少女二 「あら、こゝにはすみれ。」

少年一 「春はうめの木のそばに立って、  
そつとなでる。

たゞそれだけで、

氣品高いあの花。」

佐保姫 (にっこり笑って木をなでる。)

少女一 「ほら、におつて来た。」

少女二 「あゝ、いいにおい。」

少年二 「春はたもとを振って春風を起し、  
手をあげて招く。

あゝ、小鳥の音楽。」

佐保姫 (にっこり笑って、手をあげて招く。小鳥の合唱が始まる。)

少女一 「きれいな音楽。」

少女二 「踊り出しそうだわ。」

音楽は明かるく、だん／＼速くなる。

少女たちは、自分の中からわいて来る自由な振りで踊り出す。

少年たちも快活に踊り出す。

佐保姫 「少年よ、少女よ、みんなの喜び。

美しい健康。

明かるい歌声。

心の清らかさ。

地上の太陽だ。

春の光だ。

少年よ。

少女よ。

いつまでも楽しくあれ。」

(鳴原一穂の作による)

國語學習の手引

中等國語一(3)に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によつたものである。こゝにするささいな教材は、古典ならびに文部省作である。

課名	題目	原作者	訳者
一	散文詩	ツルゲニエフ	中山省三郎
二	ふるさとの英世	宮津 博	全訳散文詩
三	ラジオ	南江治郎	脚本シリーズ第三輯
四	リヴィングストンとス タンリー	豊島與志雄	世界探検物語
五	春を呼ぶ	鳴原一穂	

### 國語学習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行つてほしい。

#### 一 散文詩

(1) 読んだあとで何を感じたか、それについてめい／＼が話し合つてみる。

(2) この文を通して、作者の人がらについて話し合う。

(3) 次の問に答える。

イ、「愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。」というのはどういうことか。

ロ、「兄弟からの施し」というのは何をさしているか。

(4) 散文詩という詩の形について調べてみる。

## 二 ふるざとの英世

- (5) 日常の生活に取材して、散文詩を作ってみる。
- (1) 全文の筋を短いことばでまとめてみる。
- (2) 登場人物は何人か、それらの人々の性格について話し合う。
- (3) この脚本の組み立てはどうか、調べてみる。
- (4) 演出をみんなでくふうする。できればえについて話し合う。
- (5) 脚本の形式やその書き方について考えてみる。
- (6) 適当な人物の傳記を脚色してみる。できれば演出する。

## 三 ラジオ

- (1) この文の組み立てについて考えてみる。
- (2) ラジオによって、人間の生活がどのように変わったかを考えて、それを簡條書きにしてみる。
- (3) ラジオの特性について話し合う。
- (4) 放送局の組織とそれらの係の仕事とをまとめてみる。
- (5) 一つの放送が送り出されるまでの順序を簡條書きにしてみる。
- (6) できれば、放送局の見学をしたり、受信機を作ってみたりする。

## 四 リヴィングストーンとスタンリー

- (1) 長文を早く読み通し、筋をまちがひなくつかむことに心がける。
- (2) 暗黒大陸探検の困難な理由を簡條書きにしてみる。
- (3) リヴィングストーンがアフリカ大陸の父と呼ばれるようになった理由を発表する。
- (4) リヴィングストンの探検中の出来事を、日付に基づいて、わかりやすく整理してみる。
- (5) 次のことについて話し合ってみる。
  - イ、スタンリーはどんな人か、どうしてアフリカに行ったか。
  - ロ、スタンリーはどのようにしてウジジに到着したか。
  - ハ、スタンリーとリヴィングストンの会見。
- (6) 次のことを簡條書きにしてみる。
  - イ、リヴィングストンの消息が絶えた理由。
  - ロ、タンガニカ湖の探検の目的と、その探検中の出来事。
  - ハ、スタンリーのヴィクトリア湖探検中の出来事。

## 五 春を呼ぶ

- (1) ことばをはっきりと言えるように何度も読んでみる。
- (2) あんしゅうして、感情のあらわれるようになるまで何度も練習をしてみる。
- (3) どう演出すればこの文が生きてくるか、みんなでくふうしてみる。

(4) 学校生活や家庭生活に取材して、このような「よびかけ」や「詩劇」を作ってみる。

中等國語

(3)

APPROVED BY MINISTRY  
OF EDUCATION  
(DATE July 9, 1948)

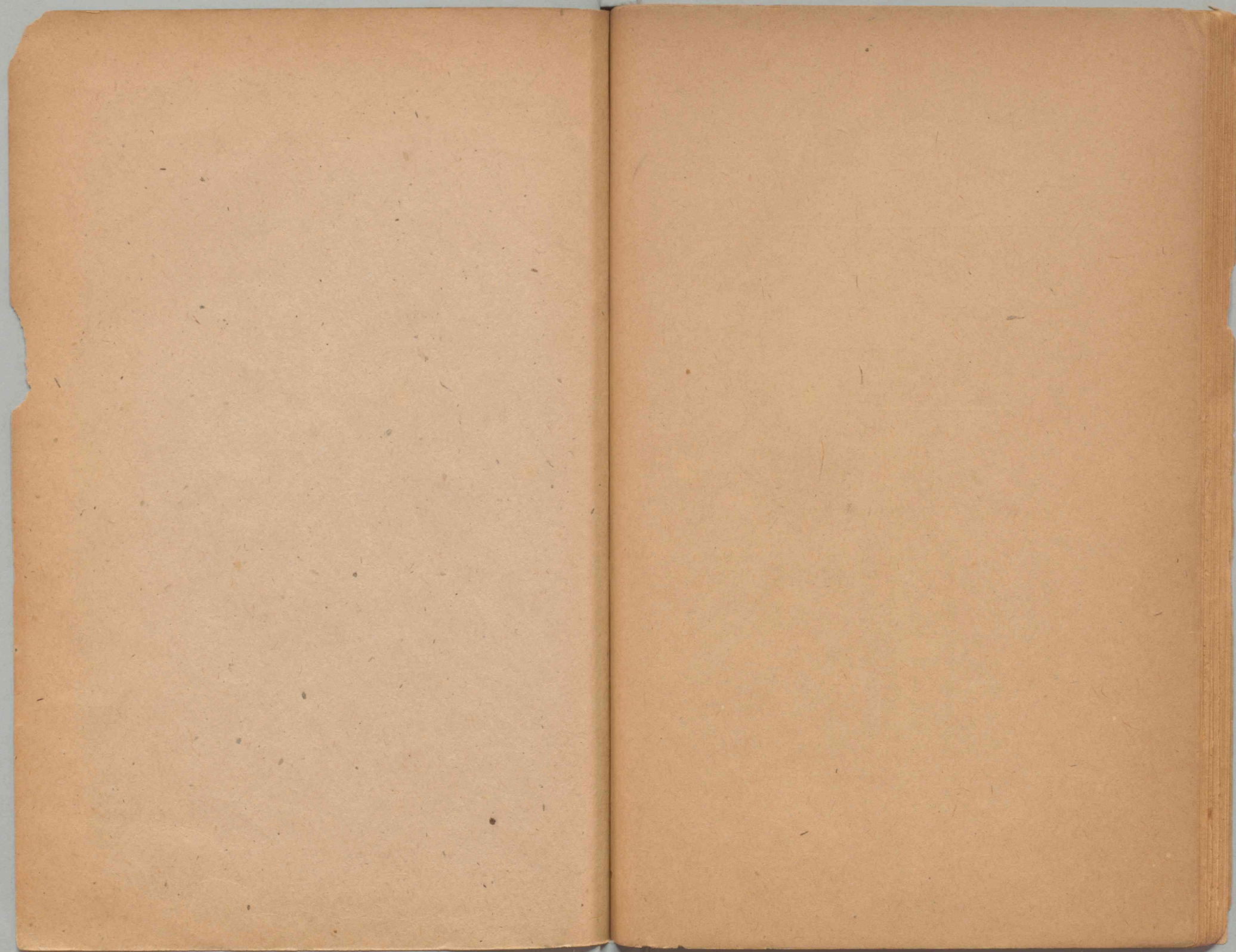
発行所

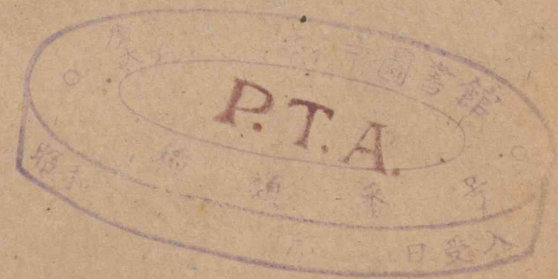
東京都千代田区神田岩本町三番地  
中等學校教科書株式會社

印	發行	著者	著作權所有者
刷	者	者	者
者	者	者	者
東京都北区稻付町一丁目二〇八番地	東京都千代田区神田岩本町三番地	東京都千代田区神田岩本町三番地	東京都千代田区神田岩本町三番地
二葉印刷株式會社	中等學校教科書株式會社	中等學校教科書株式會社	中等學校教科書株式會社
代表者 大野治輔	代表者 阿部眞之助	代表者 阿部眞之助	代表者 阿部眞之助

文 部 省

昭和二十三年一月五日印  
 昭和二十三年一月九日發行  
 昭和二十三年七月九日修正印刷  
 昭和二十三年七月十三日修正發行  
 昭和二十三年七月十三日修正印刷  
 昭和二十三年七月十三日修正印刷發行  
 (昭和二十三年七月十三日 文部省検査済)





広島大学図書

0130449813

